
アルカネスの紋章

矢羽 彩

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アルカネスの紋章

【Nコード】

N7209L

【作者名】

矢羽 彩

【あらすじ】

鶯色の髪と紫紺の瞳をもつ女はアルカネスの紋章を持ちながら付き人を従えず、何故か其の傍に付き従えるは白き狼に鳥である。巡礼の一族として使命を全うすべく、今日も今日とて旅路を行く。それにしても気になるのは、彼女の瞳が白き狼と同じ紫紺であることと、彼女の髪色が鳥の瞳と同じ色だということと彼女がまとう衣が唯一の水色であるということ。人々の好奇の眼に彼女は惑うことなき意志を表す瞳をもって前へと進みいく。

物語進行上は洋風ベースですが、過去編で和風入ります。また逆八

ー予定ですが最初の方は気配薄めです。

始まりの章（前書き）

初投稿です。書き方もそうであるように使い方も未熟ですorz
好きなものを詰め込んで、わくわくしながら書いていけたらいいな
あと思っています。

拙いですがお楽しみいただければ幸いです。

始まりの章

香水の蓋をあけるとその小瓶からは蒸気が噴き出し、甘く芳しい匂いが辺りに漂う。

それは机上にて蛇の形を成し、ゆつくりと閉じていた瞼を開くと真っ直ぐに曇らぬ眼で、己が前に存在する女を見つめる。

無言の相對の末に、女は小さく呪を唱える。

すると蛇は再び霧散し、その姿を麗しき男のものへと変えいく。そうして女の望みを叶えんがため夕闇に侵食されつつある部屋から消えて行った。

女の小さなため息を残して、静寂が室内に舞い戻る。

男は数多の女人その他を自身の兼ね備えた美しさにより魅了し、生きとし生ける者の生気を得ていた。

そして集めた力によって女主人の願いを成就す。

今までに叶えられてきたことは多く、他愛のないものから大きなものまで願ったことは思い出せないほど。

しかし、どんなに望みを現実にしても王妃の空虚な心は満たされなかった。

この広すぎる部屋と同じく。

「エイリス！ まだ街には着かないのか！？」

「もうすぐだつて何回言えばわかるのよ、グワン！」

曇り空の街道には紫紺の瞳をもった女と白狼が一匹。

他には人は歩いていない静かな通りで一人と一匹は言い争っていた。

「ああもう！私だつて早くふかふかのベッドで寝たいわよ」

「我は早くジューシーな肉が食いたい」

「どこで習ったそんな言葉！」

ぎゃあぎゃあと言いながらも歩む足は速度を緩めない。

むしろ速さは口の動く早さに負けず劣らずだった。

そうこうしているうちに街が見えてきて、一人と一匹は瞳を輝かせる。

赤い屋根をした円筒の建物が並び連なっているのが目に映る。

ここ数力月のことを思うと足は自然と急いた。

何しろ、ふかふかの寝台も美味しい食事も久しいのだ。

ずっと野宿の上に乾燥した水気のない携帯食だったので、否応なしにまともな環境への思いは募る。

そして一人と一匹は街に足を踏み入れた。

何も知ることなく。

宿場と市場の街、ワクオーンの街へと。

「見て、巫女様だわ」

「あら本当ね。でも供の人が見当たらないわよ？」

水色の僧衣には巫女の証であるアルカネスの紋章が金の鎖から下がっている。

しかし、本来ならいるべきはずの巫女に仕える付き人の姿が見当たらないことに人々は首をかしげた。

だが、それも一瞬のこと。

人々はまた違うことに興味を見つけてはそれを話題へ上らせる。

次々と口にするのは違う話だ。

だからじつと時が過ぎ行くのを耐えればいい。

すれ違う人々が時たま寄越す好奇の視線にエイリスは気付かないふりをする。

眼は真っ直ぐに進行方向の前を見つめるのみ。

足を動かし続けて、進むことをやめない。

ただ無言で歩む。

「どうした、えらく顰め面だな」

「ガリオン」

予め打ち合わせしていた通りに、待ち合わせ場所である裏通りの井戸の前に行くと既にガリオンは着いていて

エイリス達を待っていた。

「どうもこうもない。いつものことだろう」

「どうも一点集中っていうのは肩が凝る上に目が疲れるわ・・・」

溜めた息を吐きだすとグワンとエイリスは肩をすくませる。

そんな二人に「お疲れ様」と言うと彼は目元を和ませ提案する。

「宿は取ってある。疲れたろう？ 行こうか」

「ええ、そうしましょう。グワンなんて道中うるさくって仕方がなかったわ」

「我はうるさくなどしていない！」

喚くグワンを「はいはい」と適当にあしらいつつエイリスは、宿はどこかとガリオンに訊ねる。

苦笑していたガリオンは、「こちらだ」と先導して歩き出す。グワンはむっとしている。

目の端でそれを捉えつつ、小声でガリオンはエイリスに呟いた。

「この街はどうも変な感じがあるよ」

「変？」

その言葉に思わずエイリスは片眉を上げる。

「ああ。まだなんともいえないがな」

「そういえば祭りが近いのよね？ その割には人が少ない気がするわ」

ワクオーンの街ではこの季節、収穫祭で賑わうはずなのだ。

町にはとれたての様々な農作物や手作りの雑貨やお菓子が列を成して並び、通りには店がひしめき人があふれそうになっているのが定番の街の姿ともいえようが

今日ざっと通りを目にしたかぎりでは、いつもの街の風景という感じであり遠くから人がやってきている様子がない。

そもそも祭りの雰囲気がない。

「祭事の廃止？ まさかね」

「さあて、どうなのか今ひとつ掴めないよ。ここは妙なんだ」

のらりくらりとした役人の態度。街の人々のどこかうつろな感じに胸は嫌に騒ぐ。

「何もないればいいのだけどね」

近況を報告しているうちに宿に着いた。

ドアの目の前に着くなり、ここに来るまでにとった宿の部屋番号をガリオンから聞いていたエイリスは二人に言った。

「これから寝るわ。おやすみ」

じゃ、と背を向けると足早に部屋へと歩き去った。

「よほど限界だったか。あの様子だと」

「にしても部屋まで一緒でもいいではないか」

置いて行かれたとグワンは不満な態度を露わにする。

まあまあとグワンをなだめつつ、ガリオンは「お腹が減っているだろう？ とりあえず飯にしてはどうかい」

とグワンを宿の食堂に誘った。

「ここの角煮はうまいと評判なんだ」

一人で宿の部屋にいるエイリスは寝台の上で仰向けになっていた。

片腕は視界をふさぐように自分の閉じた瞼の上に置かれている。

眠りやすいように光を遠ざけ闇で目を覆っているのだ。

「疲れた・・・」

囁くように小さな声で一人愚痴る。

脳裏に映るのは、闇だ。

何も考えたくはない。ただもう安らかに疲労を癒したい。

エイリスは深呼吸をするとあっという間に、眠りに落ちた。

窓の外はまだ日の光で葉が新緑を輝かせていた。

始まりの章（後書き）

構想はあるのですが、細かいところを詰めるのと文章力が・・・。
とりあえずストックを作らねばならないですね。
誤字脱字・感想お待ちしております。

始まるの章・1（前書き）

。 予定では出てくるはずがなかった人物が誕生してしまいました・・・

始まりの章・1

ぼやけた意識下で窓の外の木々にとまっているだろう小鳥のさえずりを聴覚が捉える。

朝だ。

部屋に差し込む、柔らかな太陽の光の気配を身体が認識して瞼が動く。

昨日眠りに就いたのは、まだ日が中点を過ぎたくらいだったからまあちよつと寝過ぎといったところか。

けれども疲れていたのだから、この程度なら健康にも問題なからう。問題なのは別のことだ。

目をあければその視界に飛び込むのは一面の白銀色。

ちよつと目線を横にずらせば仰向けに寝ている自分からは、ベッドに伏せるようにして眠っているように見えるが

顔だけは横向きのグワンのきめ細かい肌や伏せた長いまつげ、すつと通った鼻梁が眺められる。

最初の頃はぎよつとしていたこの朝の出来事も今じゃ慣れた対処ができるほどだ。

それくらい奴は人の寢床にもぐりこむ常習犯だった。

「起きろ、グワン」

「・・・・・・・・・・」

呼びかけに対して無言な上に、身動きすらない奴はまるで本当に深く眠っているようだ。

しかし、こいつに睡眠なんてものは必要がないのだとエイリスはもう知っている。

「人の体の上にいつまで乗っかっているつもりだ。重いんだよ」
いくら細身だといっても男の身体であるしグワンは結構、肩幅も胸板もしっかりしている。

女の身に、しかも胸の上にその状態が乗っかられているといささか圧迫されて息苦しい。
呼吸困難に陥る前にこいつをどかしたい、とエイリスは思った。

だいたいそろそろ起きて顔を洗ってさっぱりしたいし、着替えもしたい。

昨日は着いてすぐ眠りに入ったから宿の食事はまだ堪能していないことであるし。

さつさと起きて美味しい食事をいただきたい。
恐らくグワンはもう食べたろうけれど。

さんざん肉を食べたいと言っていたから、大方気配り上手なガリオンが昨日の内にうまく誘導して餌をやったことだろう。

持つべきは我がまま唯我独尊の連れじゃなくて、気のきく相棒だな。そんなことをつらつらと考えていると、ようやくグワンがもぞつと身動きした。

「邪魔だ、どけよ」

目を眇めて、威嚇するように言ったエイリスの顔をグワンは、じっと見つめ

むくつと身体を起こすと、おはようの挨拶もなく、

いきなり何かの結論を述べるように言った。

「エイリス、昔の夢を見ていたのだな」

「ああ、そうだけど？」

いきなりなんだ、と顔をしかめるエイリスにグワンは一言告げた。

「言葉遣いが男仕様になっている」

グワンに注意をされて言葉づかいを男言葉から女言葉へと、エイリスは意識的に改める。

「それだけでも、だいたいあんたが人型になって人の寝床にもぐりこむことだって問題ありでしょう？」

宿の人間に見られたらどうしてくれる！

要らん誤解を受けたらいろいろと面倒なのだ。万が一にでも追い出されたらかなわない。多分ないだろうけれど。わかつているけれど。いつもは野宿でかたい地面の上に布を敷いて寝ているにすぎないのだから

たまにはふかふかの寝台で骨を休めたい。

貴重な睡眠時間を至福の心持で味わいたいのがエイリスの願い、というか趣味みたいなものだった。

「エイリスは本当に寝心地に対してうるさいな」

「当たり前よ！人間の人生の三分の一の時間は睡眠に使われているんだからね！」

人生の三分の一となれば、その時間の大きさは重大だ。

眠っているその間に脳は記憶の整理や疑問の解決までしてくれるし、疲労回復の効果もある。

そしてその長い時間を寝台に身体全体を預けて眠るのわけだから、いい環境に身を置きたい。

そう常々思っているエイリスに向かい合っているグワンはつまらなさそうに言う。

「そんなに寝心地にこだわるなら我が毎日抱きしめて眠ってやるのに」

「いらん！」

「っていうか毎度毎度、人の上に乗っからないでちょうだいよ！」

いつものことなのだが、次第に話の方向性がどこかへとずれていくことにエイリスのいらだちは募る。

本当にグワンとの会話はやっていられない。

意味不明な方へと話が進んで結局、最後は何を話していたのか分からなくなってしまうから

無駄に疲れるし、頭を使っても上手くいかない。

グワンのペースに巻き込まれる。

「はぁー・・・」

もういや。

嘆息して天井を仰ぐ。

そのとき視線を感じた。

鋭さを隠しきれない、殺気を。

それは、自分に向けられているもの。

「お尋ね者ね」

緩んでいた雰囲気を持ちよくして、鋭さをその身にまとう。

瞳は細められ、思考は次の行動の想定へ。

気配のもとへとエイリスは視線を向ける。

「出ていらっしやいよ。あなたの位置はもはや掴んでいるわ」

影は黙ったまま。

動く気配はみじんも感じさせない。

どちらも動かないなら、普通このまま事態は膠着するのだろうか
こちらにはグワンがいる。

「！ うっわっぁ・・・なん、だ!？」

強制的にエイリスの前へと転送されてきた対象は、乱暴に空間移動された上に途中、

着地点から数距離ある座標から落とされ、受け身をうまくとれずに腰を打った。

もちろんグワンが敵に対して情け容赦あるわけではない。

思いやりなんて与えるはずもなく、敵への扱いは手抜きそのものだ。グワンは、いつも呼吸をするように容易い術をさらに大雑把に使ったのだった。

「い、たたったあゝ・・・」

床で痛みに呻く敵のその風体がどこか間抜けで、身につけている立派なはずの軍服もどこかかすむ。

それにしても。

「潜むんだつたら、もう少し身元がばれなさそうな服を着てくるものじゃない？」

ばつちりとどこの所属かがわかるバッチまで制服つけたまま敵の陣地に乗り込んでくるとは、こ奴よほどのアホかと思う。

エイリスは呆れ気味だ。

思わず緊張に引き締めていたその表情を崩す。

もとより大した力は感じ得なかったから、それほど警戒する必要はなかったのだが、どうも過敏になっていたようだ。

「った、もう少し丁寧に扱ってくださいと望むのは間違いなんですよかね・・・」

落ちるときに床で打ったらしい腰を左手でさすりつつ、エイリスの前に落とされた何者かは下を向いていた顔を上げた。

その髪色は黄金色。

瞳はエメラルドのごとき深緑だ。

どちらかというと柔和な顔立ちで、無駄に整っているとしかいいようがないほど美形である。

輪郭から顔の各部位まできちんと設計されているようだった。ただちよつと抜けてそうな性格が玉に瑕つてところだろうか。そんなことはどうでもいい。

先ほどの問いにそっけなく二人は言葉を返す。

「無理ね」

「無理だな」

あり得ない、とその顔は物語っている。

「結構冷たい方々ですねー。巡礼の方にお願いがあってやってきたんですけれども聞き届けていただけるんでしょうか。」

俺は心配になってきましたよ………」

はぁ、と気分を切り替えるように息をはくと、金髪軍服は名乗った。

「俺は、この土地の領主から正式にあなた方を迎えたいのでお連れするように言われてきたハセ・トウイスと申します」

姿勢を正して、簡単な礼の形をもってしてエイリスらにそう告げる金髪軍服改め、ハセ。

表情を変えずに、二人は疑問を口にした。

「領主の使いがなんてこそこそした真似を？」

「不可解だな」

正面切ってやってくればいいのに、わざわざ隠れてこちらの動向をうかがっていたことが怪しい。

二人は怪訝な表情こそ浮かべないものの、その声音は淡々としてい

て何を考えているのかハセが窺い知ることが難しかった。
試されているな、と思いながら言葉を慎重に選ばうとハセは心がける。

「実は、ですね。お二人ともワクオーンの街が市場で栄えていることはご存じでいらっしやいますでしょうか？」

ハセの問いに二人は頷きを返す。

だからなんだ、さつさと先を話せ、なんてことを言われることはなかったので、どうやら二人ともとりあえずは話を聞いてくれるようだ。

それが今の頷きで分かったので、ハセは意を決して話し出す。
ここ最近起こっているこの街の詳しい出来事を。

「毎年この時期に開催する祭りの実行許可が王都から下りなかったのですが、それがどうも妙なのです」

始まりの章・1（後書き）

続きが書き終わらないのでとりあえずこのへんでUPします。

始まるの章・2（前書き）

説明シーンに入ります。

始まりの章・2

このワクオーンの街で最近起こっていること。それまでの経過について。

伝えるべきこと。

考えをまとめたハセは説明に入った。

今までは何てことはなかった普通の役人が、いつの間にやら話の通じないちよつとおかしい役人になっていった。
最初に気付いたのはそれだった。

役人は役人でも領主直属の者ではなく、王都に属する役人である。
この国では各領地に王都との連絡をつなぐ者が配属されており、その専属部署なるものが領地内に設けられている。

その役目は主に王都と領地間での連絡であり、また許可の申請もそれに含まれていた。

日ごろの挨拶やちよつとした伝達事項の連絡は上手くいっていたので、それまでは不都合がなかった。

違和感など覚えるはずもなく日々は過ぎていき、祭りの準備をする時期になって役人の顔触れが全く見たことのないものになっていたことに気付いた。

一人二人なら新入りや異動で顔ぶれが変わることはわかるが、いくらなんでも全員知らないというのはおかしかった。

第一に、その職場の人員を入れ替えるなら先に大元である王都から領地の方へ連絡があるはずなのだ。

それなのに誰ひとり知らない顔になり、祭りの件を告げると「それは許可できない」と言われるまで見抜けなかった。

間の抜けたことにそれまで事態の大きさに目を向けることもなかったのだ。

その後、どうにかしようと王都までの連絡を試みたが、大きな成果は得られず、わかったことは外部への連絡を断たれていることだけだった。

なんらかの術が施されているらしく、この地に連なる者を始めとして土地全体を術に絡めとられてしまっているようだ。

それは生まれ育った者、移住してきた者も例外なく。

人々は限定された範囲で過ごすことを余儀なくされる。

外部からの侵入は可能なのだが、内部から外へは出ていくことはできなかった。

また街の外から入ってきた者も数日経つとその土地に馴染んでしまふのか、ワクオーンの街から出ていくことはかなわなくなった。

そして最近では術の影響か、住民も意識操作を受けてしまっているようで、祭りのことなどなかったことと忘れて、どこか虚ろだ。

人々は毎日、頭にかすみでもかかった状態でぼんやりと日常を消化する。

祭りは宿場と市場で経済を賄うこの街では一番重視されるイベントだというのにすっかり頭からそのことが消えていた。

そのうえ、自分たちがワクオーンの街という土地に閉じ込められていることにも無意識に気付かないように支配されているようであった。

誰も急に外との連絡が取れなくなった矛盾について指摘しようとならないのだ。

どんどん自体はおかしな方向へと向かっていることを示す要素ばかり浮かび上がるのに誰にもそのことを気付かせないように力が働いている。

あいにくとワクォーンの街に滞在している強力な力を持つ術士はならず、力を増幅させる道具の効力も大して望めない。

この街にいるのは商人やそれに類する者ばかりなのだ。

おかしな力に対抗する術は見つからない。

連絡を取る媒介も使えず特殊な力を持つ者も現れず、状況はにっちもさっちもいかなかった。

人々は街に閉じ込められ、外との連絡もつかない。
非常にまずい状況だった。

なにしろこの街は宿場と市場で経済が成り立っており、それには人々の動きが重要であった。

人が泊まりに来なければ宿は閑古鳥が鳴き、市場には売れ残った商品が多数生じる。

流通が要のこの街で、人の出入りが止まってしまうことは経済の破綻を意味する。

それに、この街はもともと大して畑や自作農を持っていないのだ。

街の土地では、十分な作物は望めない。

収穫は微々たるもので、それは人々の食べ物も不足してしまうのだ。多少の備蓄はあっても、それには限りがある。

このままではこの街は飢え死ぬ。

このまま存在を忘れられ、

誰でも気付かれないままにワクォーンの街ごと滅びるのか。

しかし、ワクオーンの街に水色の僧衣を着た巫女が現れたという知らせが耳に飛び込んできた時、絶望の淵に立たされた領主は一縷の希望にすがる思いで、ハセに命じた。

この状況を救える者に助けを請うため、お連れするようにと。

「そのようなわけで私、領主に遣わされて巫女様のもとに参りました」

話し終わるとハセは再び頭を垂れた。

始まりの章・2（後書き）

長くなってしまったので、分けます。

始まりの章・3

「巫女様どうかお願いいたします。この街を御救いください」

頭を下げたまま、じっと動かないハセの姿を静かに睥睨するとグワンは口を開いた。

「何故、領主は来ない？」

助けを請うなら、その者が頼みに来るのが筋である。

なのに、この者の口ぶりでは領主がこいと言っているようだ。

その態度に別段不満はないが、何の理由もないのであれば事と次第によつては返答を考える必要がある。

権力に物を言わせることしかできない能なし領主なら、こちらこそそれにふさわしい答えを返さねばならない。

けれども、それは杞憂に終わる。

「実は領主は、度重なる術への抵抗を試みた結果、大変やつれてしまひまして」

今では臥せつてなかなか起き上がることもできないのだという。だから動ける自分が遣わされたのだと告げる。

この土地を大切に思う領主は、懸命に力を尽くした。

助力を求められるものには求め、自らも関わることを忘れず知識をかき集めた。

なれど、この街に張られた結界と術は強固で、抗うのにも精いっぱい。

歯向うには力が足りなかった。

ハセの話を聞いている間、ずっと黙っていたエイリスが問う。

「その土地に馴染んでしまった者と連絡が取れなくなった親しい者

や不審に思った者がいなかったのかしら？」

旅行に行ったきり帰ってこない。久々に連絡を取ろうとしたら、連絡がつかない。

そういうことに陥った場合、不審に思うだろう。

行方不明。

そうなると捜索願いが出されることが普通である。

それが地位の高い者であり行方不明リストに名が連なることになる
と自体は大きく動く。

大抵の貴族はよほどのことがないかぎり金に物を言わせて、なんと
しても捜し出させるからだ。

家名に瑕がつくとか、いらん噂がたつとか様々な要因になりそうな
ことは取り除こうとする。

けれど、貴族が巻き込まれていないのか。単に捜そうとしていない
のか。

特にワクオーンの街で行方不明になったとかいうことは聞かない。

一方、一般市民では警察もそう簡単には動けない。

家出だと一蹴されて、せいぜい今までの捜索リストに名を追加する
程度である。

それでも、人々の口は動く。

ワクオーンの街に行くに行方不明になる。連絡がつかなくなる。

そういう噂や警戒する雰囲気が出ていてもよさそうなのだが、実際
はここに入ってくるまで何も不穏なうわさを耳にすることはなかつ
た。

異様な雰囲気にも気付かなかった。

それに警察だって捜索リストの関連項目として、度々ワクオーンの

街の名前が出れば、不審に思うだろう。

捜査まではいかなくとも状況の確認に訪れるくらいはしそうだ。
そうしたら街の異変に気づくだろう。

けれど、そうはならない。

結界が作用されているから？

完璧に外部と遮断されているから・・・つまり、どうなっているか
という。

「確かなことは言えないのですが、どうやら忘れられてしまっている
のです」

始まりの章・4

ワクオーンの街に囚われた者は外部の者たちに存在を忘れられてしまふ。

その者がワクオーンの街に行ったこと。

自分の知り合いであったこと。

それはつまり生きていることを忘れられてしまうということ。

この大地に自分が生きていることを認識されなくなってしまうのだ。

生まれ育った、生きた証。

それが消えるということ。

「そして、これもまた推測なのですが・・・どうにかワクオーンの街に滞在した後、外部に出ていくことができた者もいますが」
そういった者はワクオーンの街にいた間の記憶がすり替えられている可能性が高いのだという。

自分が外に行ったわけではないから、この推測による正確なところは欠けるが

普通、突然記憶が消えているなら、それに違和感を覚えるはずである。

もしくは滞在した間のことを覚えているなら、この街のことを誰かに口にするはず。

ハセは今までワクオーンの街に滞在した者には全員に接触していた。そして、その度に状況に対抗しうる人間が確認し、またもしもこの街から出れることができたなら外の人間にこの街の現状を伝えて、助けを求めるようにと頼んできたのだ。

善意で答えてくれる人間には感謝を。断る者には術によって街の助

けを求めることを誓わせた。

街全体の命がかかっているのだ。

多少の無理強いはいたしかたないことと割り切った。

そうして様々なことを試みた後に、はじき出された結果はさきほどの言葉である。

術が発動されたことはなく、外の者たちで調べに来た者はいない。街の状態を知った何者かが助けに来ることもなかった。

誰もがワクオーンの街のことに気づけない仕組み。

徹底されたそれに、破る隙はあるのか。

諦めてはいない。

力は尽くしている。

でも。

自分たちの力では限界があることは事実だ。

「なるほどね。だいたいの事情は呑み込めたわ。では何故、私たちの様子を見ていたの？」

自分たちを訪ねてきた意向はわかった。

だが、ハセのあの行動の意味するところはなんだ。

グワンの鋭く射るような眼光に怯まずハセは答える。

自分はきちんとエイリスの問いに答えを持っている。

「どうにも特殊な状況みたいなので強力なお力を所持している方ではないと、この事態の対処は無理なのではないかと考えたのです」

確かに領主の命令は受けた。

巫女であるなら力を持っているだろうことも承知済みだ。

けれども本当に対抗しうる強さなのか。もしもそうでないなら他の手段を考えねばならない。

もう残された時間は少ない。

できるかぎり確実な方法で立ち向かう術を手に入れたい。

領主のもとへ連れて行って、それから・・・なんてやっている時間が惜しい。

今は起き上がれない主人の代わりの目として、自分が目にした人物が街を救うには力が劣っている者だと思っただらそれを申告しよう。

領主はできるものはすべてやってみるべきだと思われるようだが、既に余裕がない。

それには今は人手だって足りないのだ。

「領主の命令を実行することも大切ですが、ただ実行するだけなら何も意思を持たずともできることです」

それだけが仕事というものではないと自分は考える。

状況に即して最適だと思える判断を下すことも仕える者の役目だと思っている。

つまりはすぐ直接会いに行かずに身边をうろついたのは私の勝手な独断行為であります、とハセは言い、そのまま言葉を続けて謝罪した。

「力を測るなどと失礼な真似をして、申し訳ございませんでした」

率直に述べられた言葉にエイリスは硬い表情を崩すと、微笑を浮かべる。

ハセの言葉には誠意があった。

「それで私たちはあなたの御眼がねにはかなったのかしら？」

「調べるまでもなかったですよ。あの転移で身をもって体験させられましたから」

なかなか痛かったですよ、とハセは苦笑した。

始まりの章・4（後書き）

結構長くなってしまいました。
でもっていききたいです・・・。

次こそはガリオンの出るシーンま

ワクオーンの街・1

領主の館は、街のほぼ中心に位置する。

見た目は確かに大きいが、無駄で派手な装飾の類は一切なく貴族にしては質素なくらいだった。建物は落ち着いた色味で、見る者に品があるという印象を抱かせるのには十分なデザインだ。

それはまるで領主の性格を表すようだと言ったと街の人々は言う。

常に街のために心を砕いて、力を尽くそうとしている領主はこの街の人々から慕われていた。

また自身もそれを鼻にかけた所がなく、控え目な人だという話である。

「皆、領主の人柄にほれ込んでしまうんでしょうね」

そう言いながら、二人を相手に道中いろいろと話していたハセは締めくくった。

門番に挨拶を交わし、領主の館の敷地内に入る。

大きなドアを前にして立つと、「どうぞお入りください」とハセは扉をあけた。

開け放たれた扉の奥には、階段があった。

エイリスとグワンに続いて自分も館内へ入ると扉を閉める。

ハセの今の動作を見る限り、扉の開け閉めを仕事にするものはこの館には存在しないようだ。

それに貴族の館だというのに、二人が入っても率先として出てくる使用人や出迎えの者もない。

どうやらこの館にはそんなに多く人はいないようだった。

門扉からこの建物の中に入るまで、見かけた人はわずかだ。

それも館を維持するのに最低限必要な人数、といった程度であることが見て取れた。

考えていることを察したのか、ハセは軽く説明する。

「領主は使用人との距離をあまり置きません。なるべく居心地がよいように、家族のように過せたら、と考えております。なので、人もあまり多くはありません」

しかも領主は独身のため、家族の世話を焼く人も必要ない。

自分一人と館を維持するのに困らないだけの人数しかいないのだという。

「まあ仲間の顔も覚えやすいですし、連絡も手軽で楽といえば楽ですよ」

笑いながら言うハセのその顔は、なんだか楽しそうだ。

何か館でのいい思い出を思い返しているのかもしれない。

二人を案内するために先頭に立っていたハセに続いて階段を上り終えるとそこには沈黙した扉があった。

木製で厚みがあり、つやのある立派な家紋が彫つてある。

後ろについてきていた二人を振り返り、目配せをするとハセは扉を二度軽く手の甲で叩く。

そして返事を待つことなく、執務室の扉をあけると中に入っていく。次の部屋に迷うことなく足を進める。

もう一度、扉の前に来くると叩く。

「ハセです。巡礼の方をお連れいたしました」

戻ってきた旨を伝える言葉を口にして応答を待つ。

「どうぞ」

落ち着いた大人の声音が扉の向こうから返ってくる。

耳にすると、すぐさま「失礼します」といってドアを開く。

自分はわきへよけてから、エイリス達に部屋に入るよう促した。

初めて足を踏み入れたその部屋は物が少なく、家具が数個あるだけのものだった。

部屋の奥、真ん中に寝台があり、そこに領主はいた。

「わざわざご足労をいただいてしまって、申し訳ありません。この

ような状態なものですから」

体が弱って臥せっている領主はハセにベッドから体の上体を起こし
てもらった。

なんとか客人に会うために起きなければと思っても、そうはできな
いほど衰弱しているのだ。

淡くほほ笑んだ領主の姿は、儚く思わせた。

ベッドと領主の背中の方に大きなクッションを背もたれのようにし
て入れてやりながら、ハセはこの経緯を話す。

その間に一人の召使いが現れるとお盆に載せて運んできた飲み物を
二人に振舞った。

御茶を口にしながら、なるほど確かにこれは選りすぐりの少人数で
あるとエイリスは思った。

その身のこなしようは一流であり、入れられたお茶もまた格別だっ
たのだ。

少人数は少人数でも、できる人を集めてあるのか。それとも雇って
からできる人にしたのか。

領主の手腕を考えると面白かった。

軽く報告を聞いた領主は頷くとエイリスとグワンへ言葉を発する。

「お待たせしてすいません」

二人へ向けられたその瞳は、守るものを譲らない意思の瞳だった。

「既にハセからお聞き及びとは存じてますが、私からも申し上げさ
せていただきます」

かたく信じている、大切な物のために。

「私の愚かな過ちの終息を御二方に頼むのはお門違いとは重々承知
しておりますが」

そう、もっと早く事態の異変に気づくことができているれば、何か手
は打てたかもしれない。

ここまで八方ふさがりになる前に自分がもつと目を配っていれば。しかし後悔に押しつぶされそうになりながらも、諦めることをよしとしない。

自分の責任で街の人々を巻き込むわけにはいかないのだ。救いたい。守りたい。

そのためにはどんなことにでも力を尽くす。

できるならば自分で結果を出すのが道理であるけれども。

甘えだと人に笑われようと、何と評されようと今自分にできる最大限のことをすることが使命。

それがたとえ人に頼ることになろうとも必要ならば、責は果たす。

「どうかワクォーンの街と住民を御救いください」

めったに頭を下げることなどない貴族であり、道理を重んじる者。

けれど自分のみの力ではどうあがくにも限界があると理解すれば、

我がままで己の領域を意固地に守ったりしない。

責を果たそうと努め、本来なら安易に人に任せることを良しとしな
い者の苦しみ。

その人の、救いを他者に請う思いはどれほど痛く、下げた頭はいか
ほどの重さか。

目にする者にはそれを推し量るしかすべはない。

ワクオーンの街・2

「お二人とも本日はありがとうございました」

敷地の外へ門から二人と一緒に出ると、頭を勢い良く下げてハセは一礼した。

その様子にエイリスは苦笑する。

「落ち着かないから頭をあげてちょうだい」

「うむ」

二人の言葉に「はい」と返事をして顔を上げたハセは、

「でも、本当に感謝しているんです」

と続けた。

「まだ何もやっていないわ」

「我々が救えるという保証もないしな」

まあ我にできないということはないだろうが。

謙遜ということを知らないグワンは不敵に笑う。

それを聞いたエイリスが軽く肘で突こうとしたが、彼はひらりとよけた。

「ふっ我は事実を言ったに過ぎんぞ、エイリス」

「だからって時と場合を選びなさい」

身内だから言えるはつきりとしたもの言い注意を促す。

それで、と話の流れを元に戻した。

「いくつか疑問を解消させてもらってもいいかしら？」

「ええ、どうぞ巫女様」

その予感ハセの胸にあつた。

これは予想されていたことだ。

きりりとした深い眼差しを向けられて、緊張しそつになる心臓を落ち着かせる。

領きを返したハセにエイリスは問う。

「何故、街の人々が祭事について忘れてもあなた方は覚えていることができたのかしら？」

この街に住まう人らは、例年の行事の記憶を消し去られても、ハセや領主の記憶は消えていない。

だから、なんとか街の消滅をさせまいとしているわけなのだが、それは何ゆえか。

疑問の答えは考えれば出るが、裏付けは取っておいた方がいい。なので、彼女は問いかける。

「それは我々が常に記憶をいじられないように術を自らに施しているからです」

重要な役職や鍵となる立場にいた場合に、記憶は特に大事なものだ。一般市民であってもそうだが、立場が違えばこの大きさが変わってくる。

「重要な議会、人々の証言をとる立場、立会人、番人そういった類のことに多くかわるような場合、前もって記憶の消されることがないように内密に処置を行うのです」

たとえば、新しい法令。

発表の場には多くの人がいる。彼らが見届ける場面で失敗は許されない。

記憶をいじられて、うその発言などしてしまえば大事になる。あとで取り返しのつかないことになったらことがことである。損害ももちろん、責任もいっただいどうなることが。

もしくは人の出入りの確認。

怪しい人物や危険な、警戒すべき人物を通していけないのにあっさり通ってしまった場合。

後々に自分が通した人物の照合が合わなくなってしまったなんてことや言質が取れたことが一瞬で消えてなくなったりしたら裁判やいんなことの可能性がひっくり返されてしまうだろう。

忘れてしまえば、周囲を混乱に陥れることや命を落とすことを巻き

起こす可能性がある。

そんな事態は避けたいがために、記憶保持の術式を施す。特殊な立場にいるならば、それは常識ともいえる知識だった。

但し、そのことは内密にするのだ。

あとで犯人が分かりやすいように。

忘却の術をかけたのに相手が覚えているとなれば多少の動揺が出るだろう。

犯人が慌ててしまう一瞬、できたその隙が勝敗を分けることもある。

「そう、なるほどね。わかったわ」

大方予想通りだ。

「答えてくれて、ありがとう」

多分それは結構、内部へ関わる街の秘密の一つだろう。

迷うことなく答えてくれたハセには誠意を見せてもらったことになる。

部外者ともいえる自分たちを信用しているということだ。

それには報いなければならぬだろう。

「それにしても容易にたどり着いたものだな」

空を仰いでいたグワンがぼつりと言った。

いくら目立つ僧衣をまとっているとはいえ一応、表通りを外れてからは、後をつけられないように複雑な道を選んできた。

だが、ハセは簡単にエイリスらの居所がわかってきたようだった。街に入って、その翌日には尋ねてきているのが、いささか早すぎる気がしなくもない。

念のため、エイリスは僧衣の上に羽織を身につけてから宿には入ったのだ。

けれども見つかるのにたいして時間がかかっていない。

その疑念はすぐに解決された。

「実は、あの宿は領主の妹君の趣味なんです」

何でも料理好きや客人をもてなす楽しさが高じて、一人で商売をやりたいからと家を出た変わり者らしい。

そうして家を出て以来、知る人ぞ知るグルメな味わいを提供する宿を経営しているとか。

どおりではやく居場所が知られるわけである。

まさかこの街の領主の肉親がやっている宿屋に泊っていたとは露知らず。

「ガリオン下調べまではやっていなかったのね・・・」

「あいつ・・・」

そういえば、ガリオンは今どこにいるのだろう。そう口にしようと声に出しかけた時。

「やぁお疲れ様」

各々の視線を浴びて、ガリオンは平然と現れた。

「お前、今どこから出てきた」

「え、その角から」

グワンの追及にガリオンはおどけた仕草で返す。指さされた方向に確かに角はある。けれども。

「さては様子を窺っていたな」

姿が見えないから、そんなことだろうとは思っていた。

「いやいや、そんなことないよ」

ほほ笑むその顔が胡散臭い。

ガリオンの瞳の奥が笑っていないだろうことなど見抜いている。

グワンは声を鋭くして詰問する。

「ガリオン、お前わざとあの宿を選んだな」

確信を持って告げると相手は楽しそうに笑う。

「ああ。だって必要だったろう？ この土地での出会いがね」

悪びれることなく、むしろ気付いてくれて嬉しいよとばかりに彼は穏やかな声でそう言った。

睨みつつ、グワンは思う。

相変わらず喰えん奴だ。

夢の底

夢を、みる。

遠く記憶の底へと沈めた箱の中が開く。

二度目の生を受けた瞬間。

この世は血の色で染まった。

一面に飛び散った血液の痕跡が何があつたかを教えてくれる。

初めに目にしたのは長い漆黒の髪の間から垣間見える射るような眼差し。

鋭さを秘めたそれは理知的であつて、けれども荒さもまた内包して
いて、まるで美しい獣のようだった。

彼の者は理解していた。

己が状況。

そして、己の行く末を。

一族の死。

その瞬間から私には使命が付きまとう。

ああ。しかし私は誰だ。

記憶が混濁する。

どちらが本当の自分なのかわからなくなる。

前世の記憶が箱からこぼれ出していった。

契約により生まれ持った瞳は紫紺に。

髪色は鳶色へと変化する。

彼の者の魂は以前と変わらずに美しいまま。

またその誇り高い矜持を反映するように、纏う雰囲気も極彩色。
その器も気高い。

私は、生き残るべくして生き残った。

この命は私だけの手の内にあるわけではないらしい。

私は、我が魂は、これからのことを予感している。

そう、目の前にいるこの圧倒的存在感を持つ者を知っている。

私は運命さだめというものを信じるを得ない状況へと配された。

この者のためなら、我が魂を持って誓おう。
私の望みを叶えんがために。

今までずっと待ってきた。

ふさわしい時が巡ってくるまで。

この身になれば長き時の流れなど慣れたこと。

そう思ってきたが、まさかこれほどに長く感じるとは思わなんだ。
それほどに欲する。

募る焦燥感。逸る心に驚く。

やっと、手に入れられる。

待ち望んだ、君。

私は私。

俺は俺。

二つの人格。

でももともとは一つ。

中途半端に連れてこられたから、結びが甘くてとけていくのよ。
いや違う。

これは起こるべくして起こったことの内に入るのだ。

今は私。

今までは俺。

けれど、その前は。

ああ、頭が痛い。

零れていく、いくつもの記憶。よみがえる意識。

本当に、あなたは誰なの。

この魂を持つべき者よ。

焦がれた想いに身を焼かれそうなほど待ち望んできた。
ずっとずっと。

時の流れというこの縛りすら忌まわしいほどに。

身近に君を感じられるほど近づくことが許されたこの距離。
存在を確かに感じ取れる。

安心感。

孤独など怖くはなかった。

恐れるのはただ一つ。

愛する君と二度と触れ合うことさえできなくなることのみ。

ワクオーンの街・3（前書き）

遅くなりました・・・。

ワクオーンの街・3

「う・・・んう」

頬に当る平たい感触。

強張った筋肉の違和感に現実呼び戻される。

「ふ、わあゝ」

エイリスは夢から覚めると、小さく首を振る。

そして大きく欠伸をして自分がうつぶせで寝ている間に枕にしていた書物に目をやった。

ふう。

いやな夢をみたな。

心の中で一人、呟く。

頬に右手を当てて疲れた筋肉をほぐそうと上下にやりわりと手を動かす。

その間も思考はめぐり、視線は中に固定される。

伸びをして、長時間そのままの体勢でいたために凝ってしまった身体をすっきりさせようとしたとき

「調べ物は進みましたか？」

と麗しい声がエイリスに尋ねた。

一匹の白狼と一羽の鳥が沈黙の中、互いの様子をそれとなく窺っていた。

人型ではないもう一つの姿である獣の形で二つの意思是、大地に並ぶ。

言葉を発することがためらわれるような静寂の中、先に口火を切ったのは白狼の方だった。

「ガリオン、お主は何を企んでいるのだ？」

視線は問うた相手には向けず、ひたすらに街の風景を目に映していた。

そつと何気ない口調だった。

「グワンよ、何故そのように問う？」

わかっているだろう、と問いを返す。

もはや聞くまでもないことだ、と。

答えはどうせとつくに見当が付いているのに問うのかと、婉曲にそれを示す。

わかっている。

だからこそ、また尋ねずにはいられないのだ。

内心で発する言葉を胸にグワンは言う。

「お前の話には到底付き合いきれまいよ」

「しかし、貴殿もまたこの齒車に埋め込まれた一つの楔」

鳥の姿であるガリオンは羽根を小さくふるわせる。

「正しく回っていたこの世界の齒車を狂わせるわけにはいかないために、今は一度とめなければならぬ」

このまま破滅にまで進まずわけにはいかないのだ。

「お前にはそうであっても我にとって一番大事なものは違う」

ガリオンの守るべきものはわかっている。

けれども、グワンの大事なものを巻き込まれるのには腹が立つ。

知らないうちに、ガリオンの都合でグワンの大事なものが傷つくことになるのには我慢がならないのだ。

「いくらお主がこの世界の主といえど、我々に関与しすぎるな」
これは警告だ。

ガリオンに対して、グワンからの容赦する気はないという言葉である。

「エイリスや我は、この世界の輪廻にも、存亡にもかかわる気はない」

これ以上、過度な関わりは控えてもらいたい。
勝手な行動は遠慮してもらおう。

白狼は静かな瞳の奥で、ゆらりと炎を宿す。

鳥が横に首を動かす。

双方の視線が交る。

「もう遅いのだよ、グワン」

視線はそのままに言葉を口にする。

「たとえ君たちといえども、もう関わりなしに事を済ますことはできないんだ」

「どういうことだ」

一瞬の険しさが滲み、その纏う雰囲気硬化させる。

「それは君だって本当は気付いているはずだろう？」

「ええ、まあ」

伸びをしようとして曲げていた両腕を自然に下におろす。
そのまま自分にかけられただろう声に、背後を振り返る。

視線の先には、やはりこちらに向かって立っている一人の男性がいた。

誰だろうか。

特に知り合いでもないはずの、その人をあてはめようと頭が勝手に記憶の台帳から人物を特定しようと照合をし始める。

「何の歴史を調べていらつしやるのですか？」

小さくほほ笑みを浮かべて、こちらへと歩み寄る。

それはこちらの警戒をさせないように柔らかで自然な笑みだった。つられてエイリスも笑みを浮かべて答える。

「ずいぶんと分厚い本をお読みなようですね。」

「はい、ちよつと街の歴史について知りたく思いました。」

このくらいなら問題あるまい。

当りさわりのない程度に会話を切り上げようとぼかす。

「そうなんですか。勉強熱心でいらつしやるんですね。こちらには観光が何かで？」

「そのようなものです。」

男性がエイリスの向かいの椅子に腰掛ける。

「その本は、どうでしたか？」

「とても良い考察の書かれた本でした。ところで、どうして歴史の本とわかったのですか？」

この人は最初に何の本を読んでいるのではなく、なんの歴史を調べているのかと聞いてきた。

「ああ、それは番号の色が黄色いからね、わかるよ。分類別にするときによく使うんだ。」

急に打ち解けた長年の友のように、彼は話す。

「それに仕事柄、ここの書棚のことはだいたいは把握している」
そう言つて、何か気がついたようである服の胸ポケットから何か取り出す。

それは、小さな銀章。

「今日は非番だったんだ。だけど、ついここにいてしまつてね」
どうやら彼は、この図書館で働いているようだった。

小さな銀章は、その証であらう。

普段は身につけているそれを今日は非番なので身には着けていなかったのだらう。

だがポケットに入れていたために、ちょうどいい証明になるとエリスに見せたのだ。

「なるほど司書の方でしたか。どおりでお詳しいはずですね」

「いやまあ、仕事もあるんだけど、趣味もこんなもんでね」
いわく結局、休みでも図書館に入り浸つてしまう無類の本好きらしい。

「それはそれは私よりよほど勉強家でいらつしやる」

先ほどこの人から勉強熱心といわれたが彼の方が自分よりかなり熱心だ。

「だから、あなたの調べていることに力を貸せるかもしれない」
相手がにっこりとほほ笑む。

「お手伝いさせてください」

ワクオーンの街・4（前書き）

エイリス、ちょっと弱り気味。

ワクオーンの街・4

初対面であるはずの男性は、エイリスに手伝いを申し出た。しかし、その真意は何なのか。

見る者に理知的な印象を与えるその藍色の瞳は静かでいて、どこか読めないところがある。

どういった心情であるかなど窺い知れないが、同時にさほどの興味もない。

というわけでエイリスは一瞬の逡巡の末に、申し出を丁重にお断りすることにした。

微笑をその顔に浮かべると、エイリスは穏やかに告げた。

「いえ、結構です。もう用は済みましたので」

相手は、己の言葉の返事を耳にすると笑顔だった顔を若干、歪めて「そうですか」と残念そうに小さくもらす。

けれど、すぐにまた口角を上げて表情を改めると言った。

「では、また御用があるときには気軽に声をかけてくださいね。いつでも、この図書館にはいますから」

「はい、ありがとうございます」

ちよっとした通りすがり程度の存在に話をするとは異なるような熱心さを今のやり取りで少し感じたが、相手は自分のいったい何が気になったのだろうか。

それとも、気になったのはエイリスが調べていた内容に関することであろうか。

少々、違和感の拭えなさを感じ取ったが深く追求はすまい。

恐らく、この人とはもう二度と会うことはないだろう。

自分が調べたいことはもうあらかた調べ終えている。

よって、この図書館に足を運ぶこともないであろうし。そうならば、ほぼここに入り浸っているという彼とは会う可能性は低い。

街ですれ違う程度といっても、そう長くここに滞在する気はないのだ。

依頼が舞い込む前から、ここに立ち寄ることは予定として決まっていた。

そして、自分がもともと済ませたかった用事もさきほど済ますことができた。

今回の頼まれごとと話を聞いて調べた限り、だいたいの概要は掴んだ。

あとはいくつかの確認をとれば、容易いかどうかは不明だけれども処理できる件であろうと思う。

恐らく、残り数日くらいで我々はこの街を去る。いつものように。

だが、いくらこれから会う可能性が限りなく低くとも相手に無愛想に対応しては感じが悪い。

不快な印象を与えない程度には愛想を良くしておくために、その後

も二、三言葉を交わす。
そろそろという切りのいいところで会話を切り上げ、本を小脇に抱えて席を立つ。

そうして軽く会釈をすると、エイリスは背を向けて歩きだした。

微笑みを消した顔は無表情へと変化した。

歴史関連の本があるべき書棚へと自分が調べることに使っていた書を元の場所に戻す。

頭の中で、これからこなしていくべき項目を書きだしながら歩みを

進めて、図書館を出る。

考えながらの歩行でも、歩む足に躊躇いはない。

出口を抜けると空を仰ぐ。

先ほどまで多少薄暗い館内にいたので、まぶしくて外の光に目を細める。

ふと視線を感じて、視線を右にもっていくと二人がいた。

「お待たせ。グワン、ガリオン」

目が合い、声をかける。

一人でいた時はわずかに硬質だった雰囲気、ふわりと自然に和らいだ。

エイリスの姿を認めると、二人は傍による。

「お疲れ様、エイリス」

「では、行くか」

エイリスが目にしたとき二人は、人の姿となつて、図書館の敷地内に設置された階段の手すりに背を預けるようにもたれていた。

どうやら先にそちらの用事は済んだようだ。

「図書館はどうであつた？」

「ええ、有意義であつたわよ」

欲しい情報も手に入つたしね。

脳裏に一時、図書館での出来事が蘇る。

本当にあの人は何のつもりだったのだろうか。

そつとグワンの大きな手によってエイリスの頬が包まれた。

それは図書館にいた時に転寝をした際、下にしてしまっていた方の頬だった。

まだ本を下敷きにした平たいあとが残っているのかしら、とエイリスは思う。

頬に添えるようにされたグワンの手をするりと外しながら、脳裏に
よぎる思いを見逃す。

頭を切り替えると、今現在、片付けるべき事柄へと目を向ける。

「そちらの確認は取れた？」

「ああ大丈夫だよ」

「うむ。早々にけりをつけてやろうぞ」

エイリスの問いかけにガリオンはにっこりと笑み、グワンは力強く
うなずきを返す。

二人の自信に満ちた様子に何故か理由もなく安堵する自分がいた。
どうかしたのだろうか。

心が弱っているみたいだ。

自分は無意識に、心に圧迫でも感じているのかしら、とエイリスは
考えた。

今回の依頼が精神の負担になっているとでもいうのだろうか。
あり得ない。

思いついて即座にそれを否定した。

このくらいの物事であれば、何かの障害というほどのことでもない
はず。

ならば、なぜ。

つらつらと止めどなく思考の海に流されてしまいそうになる彼女を
ガリオンの声がとどめる。

話は、今とりかかっている調べごとに関してだ。

「やはり鍵は街の歴史だったのだね」

「そうね。いい手掛かりにはなったんじゃないのかしら」

まあ予想の範囲内だけれどね。

笑いながらも、油断すると考えが違う方向に行ってしまうことに気
づく。

精神の統一が果たされていない。

混沌を抱えている自分は珍しく、思考のまとまりに欠ける。

この弱りようはまるで、いつもの自分ではないみたいだ。

気を引き締めようと心に固く鎖をつける。

必要なこと以外は考えないように、異なる思いが流れ込まないようにする。

目の前に迫ることを、考えなければ。

心を奮い立たせ、力を尽くすべきことに目を向けよ。

己に言い聞かせる。

優先順位を考えて、負うべき任せられた仕事を完遂するべきだ。

「後悔させてあげなくちゃね」

これからすることを強く想像する。

受けた依頼にこたえる力をもったことをこのとき、感謝した。
力をその方向へと傾ける。

神による助けなんて、信じるものではないけれど。

成し遂げるべき事態に意識を集中させる。

「安易に人の命をもてあそぶとどうなるのか、わからせてあげるわ」
瞳に力を宿す。

知らず、手に力が入る。

エイリスの意思を見てとった二人は静かに言った。

「では次の場所へ行こうか」

「仕上げの前の確認といこうぞ」

ワクオーンの街・4（後書き）

そういえば、この物語は一応もともとは逆ハー風味になる予定で書いていますが、今ひとつ、甘い雰囲気にかけてますね・・・。

ワクオーンの街・5

「ところで、エイリス」

「・・・・・・何よ？」

呼びかけられ、どことなく不穏な響きを感じ取り、一拍の間があく。エイリスの顰められた眉に目を留めつつ、グワンは平常と変わらぬ顔で言った。

「その匂いをなんとかしろ」

我の鼻には耐えられぬ。

ぼそりと言つなり、腕を動かして自らの服の袖で顔の下半分を覆うようにする。

鼻の前に持ってきた手をあてて、軽く押さえた。

一方、屈辱的な発言をされたエイリスは、瞬時の茫然自失から我にかえる。

はつとした表情を浮かべると、急速に自分の中に羞恥による怒りのようなものがわき上がってくるのが分かった。

「ちょっと！ 失礼しちゃうわ！ 私が匂うってこと！？ 匂いを何とかしろって何なのよお！？？」

「言ったとおりの意味だが」

憤慨するエイリスにグワンは言葉足らずに言う。

いつも少し何かが欠けているため、グワンの話ははっきりとしないことが多い。

だが、今の様子をみるとあまり内容を口にしたくなさそうな態度であ

る。

冷静にグワンの様子を観察しつつ、ガリオンは二人の会話の成り行きを見守る。

まあだいたい予想は着いているのだが。

ガリオンがそんなことを考えつつ苦笑を浮かべてこちらをみていることにエイリスは気付くどころでなく

ただただ怒りと混乱でグワンの方に全神経を使っていた。

「なんでよ!? 館内にいたから別に汗もかいてないし、シャワーだって朝ちゃんと浴びたわよ!」

「違う。そういうことじゃない」

今言われた言葉を聞いて、ようやくエイリスがどうして怒っているのか合点がいったグワンは頷く。

勘違いされた部分を把握し、納得したというように瞬きを一つする。

ああと小さくつぶやきをもらすと言った。

「あの男の匂いだ」

グワンは嫌悪を浮かべて、そう口にした。

ハセは長く息を吐きだした。

「このままでは終わることないと思っていました」

広い部屋にいるのは二人の人間だけ。

この街の領主とその人に仕えているハセは向かい合っていた。

一方は寝台から出した上半身をクッションにもたれさせて、もう一方は立つて壁に寄り掛かっていた。

主従が会話をするにはいささか緊張が薄れた感じであった。

そう、これは仕事での関係に限ったことではなく個人的な雰囲気を含めたものであった。

以前から家族のように過ごしていたこの館の者でも特にこの二人はこの街の将来を心配しともに奔走した仲である。

ともに励ましあい、苦勞してきた二人は、今では長年を一緒に過した友人のように互いのことを理解しつつあった。

「しかし、巫女様らは見事な手腕を発揮されていますね」

「そうか」

白くやわらかな布の上で、ほつと息を吐きだすこの土地に責を負う男に安心させるようにハセは言う。

思えば、彼はだいぶやつれていた。

日に日に力を失っていく様子を目にした、あの日々を思い出すことはつらい。

自分が何もできなくて、何かをしても確たるものがなく、自分の手には何がつかめているのだろうかと不安に駆られることも多々あった。

一つしかない身体に、足りない知識。

考えるも、必要とされるものがわからなかった。

わからないなりに片っぱしから知識を詰め込んで試してみること

が続いた。

だが、それが安寧の光をともすことはなかった。
示される結果に募るは焦燥。

何度、臨んだことか。何度、力を願ったことか。

絶望に、この身を滅ぼさずに済んでよかった。

もう駄目かと思っていた。

自分たちの苦渋に満ちた日々が終わることを祈っていた。

この街が救われるようにと望んでいた。

八方手を尽くしても報われなさを感じた日には思わず叫びだし、大地を叩いた。

拳を痛めるまで、血がにじむまで叩きつけ、咆哮した。

それがとうとう目に見える形で終わろうとしている。

安息の日々が再びこの街に訪れようとしている。

活気のある街にワクォーンが戻ろうとしている。

窓の外、青と白の入り混じりあう空を眺めて領主は言う。

「巫女様に頼んでしまったことは申し訳ないが、こうして急速に光が見えてくることを思うともう本当に、これしか手がなかったのではないかと思えてくる」

やはり自らの決断は間違いではなかったと、そう思わせてくれると心が慰められる。

何も知らない彼女たちに任せたことに領主である自分は是といつても個人である彼には良心が痛んだ。

しかしこのもたらされるであろう結果の予測を知って、安堵する。

自分たちはもう手は尽くしていた、と思える。
彼女たちに任せて、これでよかったのだ。

きつと今回の件で最後にすべきだった自分の仕事は彼女たちに誠意をもつて接することだったのだ。

もう役目は終わった。

あとはただ祈るだけ。

「有難いことですね。彼女たちの手腕は素晴らしいです」

「そうだな。最後の策が、最善の策ということか」

「ええ。やはり我々のような門外漢がいくらか努力したところで、彼女たちの力の前では歴然の差だということ今回見せつけられました」

ハセがグワン達の仕事ぶりを聞いたとき、安心と同時に驚愕した。こちらが持っている限りの情報を伝えてから、あまり日がたっていないのに数日で糸口をつかみ一気に問題にたみかけようとしている。

たったわずかなものから、たくさんのことを得てくる。

自分たちの今までの努力が無駄だとは思わない。

けれど、その勢いは遥かに及ばないことが分かっているだけに、ただただ驚きを浮かべずにはいらなかった。

その手の専門家とかその道に詳しいからとはちよつと違う気がする。

「けれども、こうして掴んだものがあつたから、ようやく彼女たちが訪れてくれて、救いをと願って伸ばした手をとってくれたんだろ
うな」

なんととはなしに静かになって双方、口を閉ざす。

視線は空の青へ。

二人は鳥の声を聞いた。

廻り出す不穩の輪

まだ大抵の人々が眠りの中にいるころ。

早朝の靄に街は沈む。

「ふーん、なるほどね」

高い建物を見上げて、至極納得したという風にエイリスは軽く数度頷いた。

その表情は口角が僅かばかり上を向き、目は細められている。

「これじゃあ彼らが気付かないのも無理はないかしら」

ぐるっと建物の周りを歩いては壁に少しの距離を開けて、手を当てるようにしている。

その仕草は何かを触っているようなのに、目の前にはただの壁の前の空気をなでているだけのようになにか見えない。

その後をグワンとガリオンが数歩離れてみている。

一通り調べ終わるとエイリスは待っている二人のもとへと戻る。

傍へ寄ると、また確認するように視線を上にとっていく。

「これは重度よねえ。まあ面白い仕組みだけれど」

「ああ、そうであろうな。十式の心得がない者には見えないということであるしな」

「ましてやハセたちは武術派であって、こういったことは得意じゃないだろう」

三人が同時に目に映しているのは、数階建ての大きな建物に纏わりついた蛇の文様。

鈍く明滅する空に漂うその色はどこか怪しげだ。

蛇の文様はいわゆる一般の日常生活を送っている者らの目に普段、

触れることはないもの。
巨大な呪であつた。

「まったく、変なことに労力使う奴は昔から絶えないわよね」

「確かに。まあ人間なんてそんなものさ。そしてその攻防が歴史を成すともいえる」

「そういつたらそうなんだけどね……」

ふう、と軽く息を吐きだし、肩の力を抜く。

足を肩幅ほどに開き、仁王立ちするとぱんつと両の掌を合わせる。

「まずは手始めに、

<<意識、闇に沈み、ゆるやかにその身、流れるがままに、そのち、
穏やかそのものへ>>」

エイリスは丹田に力を込め、瞼をそつと閉じると唱えた。

その声は常日頃会話する時に出すものとは異なり、聖に近い清らかさを宿す。

数秒、念じる。

立ち昇った力がエイリスを中心に発し、街の全域に広がり行くのを感じる。

街全体が眠りの中に、封じられた。

これは人々が何があっても無事でいられるようにしたものだった。

「これで、騒ぎに目が覚めてやってくる人もいない。安心してとりかかれるわけだ」

ガリオンは術の軌跡を目で追ひ、言った。

自身の瞳には、常とは違う色がよぎる。

それは紛うことなき黄金色。

空へと視線を走らせるガリオンなど一切の意識を払わずにグワンは口を閉ざしていた。

ただ一心にエイリスを見つめている。

ふと目を留めると、瞬く。

「エイリス、先に力の補填を済ませろ」

そう言つて、大股で瞬時に近づく。

エイリスの片腕をつかみ、自分の懐へと引き寄せる。

「え、ちょっと」

有無を言わず暇もなく、グワンは両の手でエイリスの顔を包み込むようにする。

そして左右の頬に唇を寄せて、そっと押しつけるようにゆっくり口づける。

近づいてくる、グワンの端正な顔。

すつと通った鼻すじ。男らしいが決してむさくるしはない美。長いまつげ。意志の強さを感じさせる眉。

このまま見つめているのも何となく違和感があるので、仕方なくエイリスは目を瞑る。

程よい肉厚のグワンの唇がなでるようにエイリスの肌に触れた。

次にエイリスの額にかかる前髪をよけて、少し口を開いた形で口づけた。

これで力の補填は終了であるのだが最後にグワンは舌で肌をなめた。

「ひゃっ、何するのよ!？」

ぬるつとした感触にびっくりして、閉じていた目を開く。

思わず瞼を上げた瞬間、視界にめいいっぱいグワンの瞳の色が広がる。

エイリスと同じ、紫紺の瞳。

しばし、二対の紫紺に瞳が見つめあうかたちとなる。

何も答えないグワンにエイリスの方が焦る。

無言で見つめられることほど緊張することはない。

「ちょ、ちよつと、近いつてば!」

「ああ悪いな。エイリスが我をみてくれぬゆえ。つい、な」

「つい、でなめないでよ! 驚いたじゃない!」

こちらは視界が利かない状態だったので、余計に驚いた。

まさかなめられるとはついぞ思っていなかったので、思わず飛び跳ねなかっただけ上等だ。

だいたいこっちは気恥ずかしい思いを我慢して、この身を任せていたというのに。

はっ、恥ずかしさなんて私を感じなくてもいいじゃない。

これは力の補填の際に必要なことだからしょうがないのよ。

というか、そもそもなんでこんな方法で力の補填なんてしてんのよ!!

エイリスの胸中では様々な思いが飛び交っていた。

廻り出す不穩の輪（後書き）

グワンさん無言過ぎて、伝わらずらいよー

廻り出す不穩の輪・2

「はい、エイリス。ちょっとこっち向いてね」

につこりと笑うとガリオンはエイリスの身体をグワンから素早く奪い取るようにする。

グワンにのぞきこまれた体勢のままグルグルと考えていたのが、その実、表面上は何ら変化なかったエイリスも気付くとガリオンの顔が目の前に迫っていたのでぎょつとした。

「力の補填は俺にも行わせてくれるだろう？」

日ごろから笑みを絶やさないガリオンであるが、笑みを深めたその顔は見る者の視線をとらえてはなさない。

エイリスも見慣れているはずなのに、一時ばーっとしてしまった。我を取り戻すと、ガリオンの笑顔に自分の目が釘付けだったのに慌てる。

「ど、どうしたのよ。二人ともなんだか今日はおかしくない？」

「ふふっ気にしないで。いつもどおりだから」

「うむ。何ら気にするところなどないぞ、エイリス。しかしガリオンはもう少しエイリスから離れる」

双方をきよろきよろと見た後どうしようもなく、視線を中空で漂わせ、戸惑うエイリス。

彼女の両側を笑みをこぼすガリオンと相変わらず無表情であるけれど若干不機嫌そうなグワンが固める。

「いいじゃないか。グワンはもうしたんだから、次は俺の番だよ」

「え、もういいわよ。グワンので十分だから」

「グワンのは受け取れて、俺のは受け取れないっていうのか？」

「いえ、そういう意味じゃなくて。さっき補てんしたばかりだからこれ以上なくて支障はないってだけで」

「支障はないだけなんだろう？　だったらあるにこしたことはないはずだ」

「え、まあ、そうであるようなそうでもないような」

要らないと拒否しようにも、悲しげな顔をされると困る。

はつきりと言えはいいのに、なんだかそんな気分になれなくて、自分の心に迷いが生じる。

確かに力はあればいいけれど、ガリオンにも照れくさい真似をされるのかと思うと気後れしてしまう。

いつもはなんてことはない。これはただの義務や儀礼と思って耐えてきたのだが

今日のエイリスの心では、自分をうまく取り繕うことができそうもない。

大事な事の前にこれではいけないのに。

頭の中でいろんなことを考えてしまい、わずかに気落ちする。

「エイリス……」

「あ、いえ、うん。なんでもないのよ」

なんとかしようと言い逃れを試みるもしどろもどろなになってしまいう上になかなか手ごわい。

いつもより押しが強くないかしら。

それとも私の断る力が弱っている？　あれ、どうしてかしら。言い負かす事が出来ない。

なんだかんだでエイリスの力が弱まっていることを察している二人はここぞとばかりに畳みかける。

「だいたいエイリスは普段から気を張りすぎなんだ。もうちょっと休んでもいいくらいだ」

「もつと我らを頼るがいい。そのための我らであるぞ」

「そーそ。巡礼の巫女様に仕える者が二人だけなんて少ないくらいなんだからたくさん俺たちに言えいいんだよ」

「巡礼の巫女に仕える者の役目。力の補填もその一つにすぎない。精神の安寧。それこそが巫女に必要なものであり、我らの存在意義とも言えるのではないか。そうであらう？」

「ね、エイリス。もう少し肩の力を抜いてごらんよ」

迫る二人の心配げな顔や憂い顔にどうすればいいのか。とりえあず美形が近すぎる。

離れてちょうだい！

と、エイリスの心の中で気の強いもう一人の自分が叫ぶ。

「あ、ありがとう。でも今はもう十分だから……」

心配してくれるのはありがたいが、正直、そこまで力のいれすぎとかはないと思う。

それに先ほど術を少し使った程度では、あまり力の不足は感じていない。

確かに最近、力に満ち満ちたこともないけれど、決して足りないわけでもない。

そんなにたくさんは不要だと断ろうとしたエイリスだが。

「念のためだ」

「備えあれば憂いなしっていうだろ」
きっぱり言い切る二人。

第一、巫女の力というものは、一度に一気に減ってしまい、瀕死の状態になることもあるのだ。

そうであるから常にその身にある力の器にできるだけ水のように力を注ぎ、潤い満たしておく必要がある。

いくらエイリスが稀にみる源泉の持ち主であろうとも油断はできない。

二人にとっても、懸念材料はできるだけ少なくしておきたいという思いがあるため、その点ではエイリスに譲ることができない。

エイリスはまだ力の枯渇にあったことがないから、二人ほど思うところはないのだ。

ガリオンもグワンは決してエイリスにそんな目にあっては欲しくないし、見たくもない。

だから、頑なにまで力の補填を断り、滅多なことでは必要ないというエイリスを説き伏せようとするのだった。

エイリスの白い手を取り、自分の額にその甲を当てる。

ひざまずき、主君に誓うの騎士の姿勢をとったガリオンは今度は、エイリスの手を翻し指一本一本をなぞり、両方の手で守るように、慈しむように包み込む。

それを左右の手、それぞれ行う。

仕上げてエイリスの髪をひと房、手に取り口づける。

鳶色のその髪は、鳶色の瞳の主によって力を加えられる。

髪からエイリス本人へとガリオンの力が巡る。

先に行われたグワンの行動や今のガリオンの行動。

傍から見たらはて、何をやっているのだと思ってしまうじゃれ合いにすぎない行為だけれども

その知識がある者には力を補っているのだとわかる。

巡礼の巫女には付き従う者がいる。

魂の浄化に要する多大なエネルギーを失った際に補うために、力ある者が旅には同行するのだ。

場合によっては急遽、力の増幅を必要とすることもあるので潜在する能力の高いものが同行者には選ばれることが多い。

また従者の存在意義には力の補填以外にも精神面での支えとなる役目がある。

多くの魂に触れ、目には見えないものと接する機会が多い巫女には、ともすれば現実と乖離してしまうこともある。

いくら精神も力も強靱であろう立場といえども、日々衰えの原因となるものを近くに、身を置いていれば力もすり減ろうというもの。

そういったあらゆる面を考慮しての従者である。

巡礼の巫女以外の能力ある者も、様々な理由によって数名の協力者とともに旅をしているものである。

本来ならばもつといてもいい従者であるが、二人と人数が少ないのはエイリスの事情による。

廻り出す不穩の輪・2（後書き）

甘い雰囲気ないし、ガリオンもグワンも雄弁じゃないので台詞少ないッ！

と思っていたら、こんな感じになってしまいました。ここでこの場面というのは微妙、、な気もしないですね。

そして甘さ目指したら、エイリスが弱りすぎてしまうorz

ガリオンの一人称が分からなかったので「俺」にしてみました。これでもいいのでしたっけ。

廻り出す不穩の輪・3

二人の生命力に満ちた鮮やかなエネルギーを注ぎ込まれたことによってエイリスの力を溜める器が十分に潤った。

体の中から力が沸き起こっていることが彼女には感じられた。

二つの異なる力は、中和されてエイリスのものへと変わりいく。

その変化は傍目にもわかる。

力を加えられた際、エイリス自身の纏う色に紫紺が入り、鳶色がさらに混ざりいく。

そして最後に彼女自身の持つ能力により、洗い流されるように水色へとふつと色が変化したのだ。

自分たちの持つ力が不和を起こすことなく、取り込まれるのをいつものように二人は確認した。

「相変わらず清涼な気だな」

「ああ美しい」

鮮やかな色が、更なる発色を伴ってエイリスの内へと完全に消え去る。

気配の残滓。

かすかなそれに、空気が揺らめいた。

集中して力を一点に集める。

「私の力を持って、この界、執り行つ」

右手を高く、掲げひと息に振り下ろす。

腕に巻きつかせた力を勢いを持って物体に投げつける。

「風よ、呪縛を放ち、穴を開けよ」

建物に纏わり憑かれていた蛇の文様を解く。

呪を放ち、人の目に容易に触れることなく、建物の存在を希薄にさせるようになっていた効果を無効にする。

これで今までのように無意識にこの建物を避けるように遠回りしてしまうことはなくなる。

呪を仕掛けたものの意図としては、近づかれると不本意だったのだろう。

感づかれないように、人々が意識しづらいように呪はかけられていた。

「幽明の儀を」

呪を放つと、建物内部から猛烈な気が動きだす。

負に満ちた、重いそれは魂の怨に染まってしまったものだ。

エイリスはあの世に行くべき魂を相手にするべく、布陣をひく。

あるべき場所へ、あるべきものを。

その存在を導く権限が彼女にはあった。

蛇の文様が消え、扉が開く。

建物からは大群が押し寄せてくる。

よくそこまでいたものだといっそ感心してしまいそうなほど、彼らの数は多かった。

本当にこの建物の中に今までいたのかと思ってしまっ

よもや建物内部に別の場所からここへ兵を送る陣でもあるのではと勘ぐってしまいそうだ。

「操り人形か」

「そうね、あれは傀儡だわ」

死者の魂を入れられた器である肉体は、眼窩は落ち窪み、皮膚は乾いている。

今にも崩れ落ちて、砂になってしまいそうな彼ら。

けれども、その身に背負う怨念は重く、大地に震えを走らせる。

「死者の魂を無理やり入れたまま、この世につなぎとめて支配しているな」

「重圧がかなりのものね」

「これだけがここにいたのだろう」

この建物に生きた人の気配はない。

もともとここに常駐していた人々が入れ替えられたときに、生きている者ではなくこのものたちが入ってきたのだろう。

生者は何も知ることがなく。

おそらく、幻術が何かで、生きた方が死んだ方かに呪いがかけられていたのだろう。

すべては滞りなく、行われるように。

交代が終えた後の確かなことは一つだけだ。

そうして封じ込められた負の力は強く、より強い怨念へと成っていったのだ。

集まれば、あれらの力は増大の限りを知らない。

「都合のいい手段として考えたわけか」
「あまりにも趣味が悪すぎる」

本人たちの意図したものではないことの重なり。
苦渋。呪縛。欠落。

人の魂は死したら速やかに浄化させなければならない。
肉体とのつなぎとめる楔を失ったのであれば、魂にとってこの世は
決して安寧を与えてはくれないところだからだ。

一刻も早く、しかるべき清浄な気のある場所へと送らなければ魂は
怨気にまみれてしまう。

人の体から抜け出たばかりの魂は無垢で、そして染まりやすい。

今、対面しているこの死体に無理やりにつなぎとめた魂は、出たところを捕まえられたのか。

ももとの自分の体と魂でも死んだあとでは相当な負担がかかるというのに、もしも他人の体に魂を入れられたとなると、もっと最悪だ。

数多いる傀儡の一人がエイリスに切りかからんとする。

それに気づいたグワンが相手にしていた傀儡を切り伏せ、駆ける。

二人の間に滑り込むなり己の力を手に込め、グワンは放った。

ふつとばされた傀儡を見やり、エイリスを振り返ると言う。

「どうする、エイリス？」

「大丈夫。伊達にこの職に就いているわけではないわ」

挑発するようにセリフを放ったグワンにエイリスは不敵にほほ笑む。
お互いにこれはわかりきっていることだ。

いくら量が多かるうが、力の補填を行った後だけに余裕がたっぷりある。

いつものままでもたぶん問題はないだろうけれども、まさかここまでするとは思っていなかっただけに、エイリスは心の中でひっそり力を分けてくれた二人に感謝した。

存分に力をふるうことができる。

「御霊、正しきある場所へ」

言霊をのせたエイリスの声が怨念たちのもとへ集束する。

三人に襲い掛かっていた傀儡たちはぎくしゃくと動きを鈍らせた。身にまとっている鎧や剣が動こうとする彼らによって力チ力チと音を立てる。

「邪よ、消え去れ」

地面から上へと凝縮されるように、吸い上げられる。

目に見えて、気分が悪くなりそうな悪意の塊である怨念の濃度に景色が一瞬見えなくなる。

傀儡兵たちの真上にまとまったそれをエイリスは術によって穿つ。

あいた穴から、ぱらぱらと砂のように小さなかけらとなって零れ落ち、地面に着くころにはそれは消えていった。

取りつかれるとも、操られるようになっていた原因のものが去ると傀儡たちは力を失ったように崩れ落ちる。

そこにエイリスは無理やり場所を拘束されていた魂を解き放ち、道を作る。

この世ではないあの世に魂を道にそって送り届けると今度は抜け殻となった軀を見やる。

「清の空気よ、このものを地に還せ」

そこらじゅうに倒れこんでいた操り人形と化していた魂の入っていた入れ物は、この世と再び一つになるべく、地のもとへと還る。どこからともなく一陣の風が吹き、はらはらと崩れ落ちていったものたちを救い上げるとそこには何もなくなった。

魂は天へ。体は地へ。

あるべきものをあるべき場所へ。
還るべき時が来たのならば、それは自然の理に従い還すのみ。

それがエイリスの仕事。

淀むような負の塊が浄化されると、ふっと肩の力を抜いて辺りへ視線をやる。

右へと左へと向けると、空を見て、足元を見る。

いつもどおりの空。

何もなくなつた、平らな大地。

新たな生命を得るその時まで、今は安らかな眠りを与えん。
彼らのことをそう思って、ただ祈った。

廻り出す不穩の輪・4

「これで終わり」

小さなつぶやきをもらす。

右手を軽く握って、力を打ち消す。

「お疲れ様」

「ありがと。もう一仕事ね」

声をかけたガリオンにエイリスは力なく笑みを返す。

疲れたようなどこか儚げな感じはこの世にあらざるものと触れたせいだろうか。

魂の葬送の後はいつもこんな感じだ。

やはり巫女の仕事は本人にしか感じ取ることができない。

魂の叫びも込められた願いも、触れることのできる巫女にしかわからぬこと。

力を分けてやることできても魂に直接触れることとなったエイリスの心の中までは知ることができない。

寂しげな後ろ姿に、グワンの胸は否応なしに締め付けられる。

できることならば、なんだってかわってやるというのに。

こればかりはどうにもならないのだから仕方がないと理性では思うが、納得しきれない。

制御できない感情の部分が苦しみ、それは募る。

「あとはこの街の人たちの記憶を取り戻すだけ。さっとやって済ますわよ」

「いや、残りは我々で行おう」

「そうだ。休めばいい。エイリスの分はもう済んだ」
「いいわよ。力もまだ大丈夫だし」

今日で片が付くこの依頼された件に関しては、あともう一仕事で完遂といえるだろう。

たった一つだけ。されどあと一つ残っている。

二人がエイリスを休ませようとするが力の温存は不要と彼女は言う。そんなやり取りをしていた中で、飛び込んできたものは目の端を過ることなく空を横切る。

声とともに、得物はよけられた。

「危ないッ！」

死角から迫った剣を払いそのまま敵に肉薄する。切り返した刃は鋭利に光っている。

剣をぐつと握りなおす。その表情は厳しく、唇は無一文に結ばれている。

「たあッ！」

気迫を込めて、切りかかる。大きく踏み込んだ足が土の上を滑り砂埃を立てる。

刃が音を立てて、切り結んだ。

ぎりぎりと呼し付けあった部分から込められた力がわかるように後ろ姿まで揺らぎない。

「ハセ!?」

驚きに思わずエイリスは声を上げる。
突然、攻撃されたことにも驚いたが、まさかこの場所にやってくる

とは予期していなかった人物の登場に虚を突かれて、目を見開く。自分の肉眼がとらえた映像がにわかには信じられなかった。

あと少しで終わりだったのに予期せぬ出来事が起こり、予定外の助っ人が加わり人生は計画通りになっていかないとわかつているけれども、冷静になろうと思いつつそうはなりきれない自分が驚いていることをエイリスは理解していた。

「なぜここに!？」

どうして眠ってはいないのか。

今、このときは街の者たちには穏やかな眠りの守りが与えられているはず。

問いを浮かべた次の時には答えが出ている。

ああ、多分守りの術の及ぼす効き具合に惑うことなく押し切ってきたのか。

領主とハセ。彼らには防御の術があるから。

だからきつとそう。

守られることなく動くことができ、襲い掛かる気配もなく現れたものに対峙できるのだ。

ではなにゆえに現状を知らなかったこの危険かもしれない土地にやってこようとしたのか。

ハセらには簡単な報告しかしていないし、予定では何も問題などおこることはなかった。

だけでも、この場に駆けつけ、エイリスのことを狙う刃から守ってくれた。

それは守られることだけに満足できるような者たちではないから。

エイリスたちに街のこの事態を頼むときだって隠してはいたが、やはりやりきれなさみたいなのを心の中に抱いていたことは先刻承知済みだ。

何かできることはないかと、考えてきてくれたのだろう。

「次は誰だ？」

気絶させるように、相手にこぶしを叩き込むと周囲を睥睨する。

威圧させるように、低められたハセの声が空気を重く震わせるようだ。

しかし、対するは人の心を眠らせた者ら。

人ではあるが通常引き出せうる個々の人間の体力・筋肉などを考慮したものではない、それらを超えたものが引き出されている。

素早いがどこか人間の動きとは異なる、軽やかな動き。

明らかに操られたものである彼らは、操り主の意図によって動くのみ。

彼らにつけられた見えない糸が緩められた状態からぴんと張るようになったのが目には映らなくともわかるよう。

一斉に彼らは襲い掛かってきた。

「住人が操られているの！ なるべく傷をつけないで！！」

「くっ、わかった！ 大丈夫だ！」

多勢に無勢。

そんな言葉が頭をよぎる。

周囲を取り囲むように、じりじりと距離を縮めていた彼らは、今では入り乱れ油断も隙もできない状態だ。

視線は一転に集中させながらも気配を感じ取ることを怠ることは許

されない。

なぜならば、常に控えている敵の刃にその身をさらすことになるからだ。

こちらは数名。対して住民はほぼこの街全体の数だろう。

そして、我々の目の前には姿を現さない操り主。

今回の仕掛け人にも関与している者なのは間違いないだろう。

この件が一人によるものなのか複数なのかはまだわからないが、おそらく術者はあの傀儡と同じ気がする。

死者を安らかに眠らせることなく、非道な仕打ちをしたあの術とこれは似ている。

推測だが、随分前からこの街の住民たちに祭りのことを忘れるのと同様に操りの種を植え付けていたのだろう。

発動する条件、期限などを考えられ、普段は術の気配すら隠しおおせるようにひっそりと根付いたままとなるように。

住民には何も知ることなく、静かに平和に過ごす日々をもうすぐ取り戻してあげられるはずだった。

けれども、実際はこの騒動に巻き込まれてしまっている。

眠りの守りを与えていたはずなのに。

確かに、その効力はまだ守られているようだが、彼らは体の動きが支配されている。

嘆き叫ぶさまを楽しみながら操る下劣な奴も世の中にはいる。

殺したくないと涙を流す者の体に乗っ取り、その眼前で己の手で操られているとはいえ、手を下すさまをさまざまと見せつけ楽しみ、大切な者を自らの手で失わせ絶望の淵へと落とし込む卑劣極まり手段を好む者。

眠りの中にいるならば、住民たちの意識は守られたまま。

何か終わってもこのことを覚えていることはないだろう。

なんとか最悪の操られ方は避けられる。

だが、望むもののいない行為を強いるその行動は最低なものだ。

守ってやりたい。

何も知ることなく穏やかに生きていくべき人たちが、この世の中にはいると思うから。

今回ののは全部、自分のせいだなんて言わないけど、それでも背負いたいと思う。

世の中の暗い部分を知るのは自分たちだけでいい。

彼らにはゆるやかな時を送り、それを全うする資格がある。

こうなってしまったからにはなんとしても食い止めなければ。

「ちっ次から次へと！」

「多少やりにくいな」

「一気に行ったほうが賢明か」

どうやら時間もあまりないようだ。

廻り出す不穩の輪・5

逡巡したのは一瞬だった。

迷っている暇はない。決断は即行すべきだった。

常にあちらの方へと傾けている力は何とか保持しつつ、あの方法でいくしかないだろう。

決意を固めると眦をきつとあげて、姿を現さない敵のことを思う。汚い手ばかり使ってくるなんて。

気に入らないわ。

どうでもいい相手と思いたいところだけど、大いに気に入らない。むしろ、嫌いだと断言できる。

怒りに術の精度が上がる。

怒れば怒るほど、燃え上がる部分とは別に頭のどこかが冷静になっていくのだ。

それは一種、冷たく冴えわたる思考を生み出す。

好きになんてさせない。

完膚なきまでに叩き潰す。

エイリスが思うに、この術を操る人間はなかなかに矜持が高い人間が多い気がする。

そして余裕で人をもてあそぶ。見えないところでほくそ笑むタイプだ。

手の込みように計算高さを感じるし、やり方に人を見下していることを想像させる。

そんな奴がのうのうと生きていくなんて我慢できない。
誇れない生きざまを思い知ればいいのよ。
暗い思いが胸の内でもくもくと雲のように生じる。

今でも閉じた瞼の奥に潜む幻影。

憎んだとしてもどうにもならない。どんな秘術を使おうとも過去は戻すことができないのだから。

そうわかっているのに、ふとした時に思い出してしまう。

あの血にまみれた光景を。残虐そのものを映した部屋を。

心が囚われそうになほど悲壮な思いにふたをして、今は敵を倒すことへと意識を傾ける。

人の身にふさわしくないものへささげたその身を後悔させてあげるわ。

傲慢な考えともいえることを思い浮かべるとエイリスはすつと口角を引いた。

それは力を持つものが絶対的な勝利を予感しているときに見せる笑み。

「ハーシースの祈りに則り 我願う 解きの花ひらく 閉ざされた闇より 然るべき形へと 回」

膨大な力が場に生まれる。

出現したエネルギーの固りに重圧がかかるが、それも一瞬こと。すぐにエイリスが力を解き放ち、目標のもとへと向かわせた。

目に見えるほどの光。

見るものに一目で屈服を促すような絶大なる高みの位に位置するものだった。

本来は言葉を唱える必要などないエイリスであるが、いつも言葉の力を補助に使っている。

それは常日頃からある場所に潜在エネルギーを注いでいるから。起きているときも眠っているときもエイリスから力は外へと運ばれる。

滅びの地へ巫女の力は向かい、彼女はその身に潤う加護を捧ぐのである。

もとより強い力を宿しているが、言葉の補助を使うことにより力を高め、常に余裕を保つことができる。

そんなエイリスであるが、ここ最近どこからか引つ張られるような感覚があるのだ。

いつも自然と流れ出ていく力の方向とは違う向きに。

振り向きたくないような、振り向いてしまいたいような、些細な、わずかばかりのすれ違う感じ。それが気になる。

右膝からぐつと崩れ落ちる。

前のめりに倒れこむところを力強い腕が伸びてきて抱きとめられた。駆けより、そばに控える彼らが一樣に浮かべるのはどこか驚いた表情。

いや、焦りか。それとも。

「大丈夫か!？」

「エイリス!!!」

「巫女様?!」

エイリスのはなった力により、街の人々が一斉にふっと糸が切れたように動きを止めて、倒れこむ。

事実、操られていた繋がりが絶たれたのだろう。

今頃、光の打撃を食らった術者が疲労困憊で痛みを呻いているはずだ。

しかも、先ほどの術に術者の今後の力を失わせるものを重ねて乗せておいたので、落ち着いた頃、きっとその者は抛るべきところをなくして戸惑うだろう。

力におごり高ぶるものは失ったとき、他に何も無いことに気付くのだ。

そして、やりなおしてくればいい。

自分が何をしたのか、見つめ、新しいことに気付いて生きてほしい。

「これで大丈夫ね」

ふうと息をつくエイリスを心配そうに見つめる三人に彼女はかすかに笑う。

「私は大したことはないわ。たまっていた力が一気に抜けたから体がびっくりしているだけよ」

「しかし、顔が蒼いぞ」

「ちよつと消費量が多いのではないのか？ 無理をせず休んだ方がいい」

「屋敷まで運びましょうか。ここからですと、その方が近いでしょうし」

強がるエイリスにどういってもしょうがないと意見を聞かず、三人は今後を話し始める。

無理にでも自分を休めようとしているのを感じ取って、ここは観念しといたほうがいいかなとエイリスは思った。

「あとは屋敷から人を呼び寄せて、住民の手当てをしようと思います」

「我々も多少の治癒なら使える。手伝おう」

「あつそうなんですか。それは助かります。お願いしますね」

話がつけられていく内容に耳を傾けるが、それも言葉として意味を持つことなく雑音になりつつある。

三人が話している間も眠りが訪れつつあるのだ。

口では大丈夫だと言いながらも満足に取れていない睡眠が肉体の疲労を蓄積させるばかりだということに本当は自分自身が気づいている。

それでも、できるだけ甘えはしたくないと思っている。

しかし不本意だけれども、枯渴してはいないが、それでもいつもよりはだいぶ減っている力の状態ではこのまま目を覚ましているよりは眠るほかないかもしれない。

幸い、これで依頼は済んだと言えよう。

あとはもうお役御免だ。

うつらうつらと眠気眼とたたかっていると、ふと気配を感じてエイリスは顔を上げた。

廻り出す不穩の輪・6

顔を上げたエイリスは、地にへたり込んだ姿勢のまま目をやると、建物と建物の間にひっそりと人影があることを見て取った。

視線が合うとにつこりと笑うその人が前に話をしたことがある人物と気づくのにそう時間はかからなかった。

「あつ」

気づきの声を小さくもらすと話をしていた三人がなんだろうとエイリスに目を向ける。

続いて、エイリスが見つめる人物がいることに気づきその先へと視線を移す。

四人に目を向けられて、出てこざるを得なくなったのか、たまたま時が重なったのか。男は建物の間からこちらへと近づいてきた。

「こんにちは」

この状況下で、いきなり日常に戻ったかのような至って平凡な挨拶だった。

先ほどまで命のやり取りをしていたというのに取りとめのない日常へと、急に呼び戻されるような普通の調子の声音。

「誰だ？」

「前に図書館で彼女にお会いしたことがあるものですよ」

誰何の声に怯むことなく、愛想よく答える。

ガリオンは鋭く問うたというのに、まるでそれに気づかなかったように男は穏やかそのものの態度だった。

鈍いのか、もしくは気づいているが事を荒立てるつもりがないということがあるか。

後者だとすれば余裕とも取れる態度が逆に胡散臭いという印象を相手に与えていることになるが、それはこちらの深読みにすぎないかもしれない。

「そうですね？ エイリスさん」

「知り合いか？」

面識があることを強めるように、エイリスに同意を求める男。

喋ることも疲れて億劫なのを何とか封じて、確認するように言うグワンへ仕方なくエイリスは会った時のことを答える。

「話をしたの。司書だそうよ」

「そうなのだったのか」

溜息を吐きながら面倒くさいなと思うエイリスをじっと見つめて、グワンが虚偽がないかどうかを見定めようとしていることがわかる。別にエイリスを疑っているとかそういうわけではなく、言っていないことがないか視線で問いただしているのだ。

事実、この男と図書館で会って話をしたことに変わりない。

知り合いというほど近いわけでもなんでもない関係であるが。如いていうなれば、単なる擦れ違いよりはほんの少しばかり言葉を交わしたというだけである。

ただ、そんな細かいことをいちいち問いただされて説明するのも割に合わないので、この場合は簡単に肯くに済ませる。

多少大雑把なところがあるエイリスは、それでよしにしようと思った。

そんなとき、思いもしない言葉が耳に飛び込んできた。

「みなさんお忙しそうですし、僭越ながらエイリスさんは私がお運びしましょうか」

「は？」

「領主館への道のりでしたら、私もこの街に住んでいる者ですのでわかりますから」

「いや、貴殿にそこまでのことをしていただく必要はない」

「しかし、この光景を見るに人手はあつた方がよいのではないかと」
「貴様・・・？」

「目が覚めたら物音がしたもので来てみたら、このような状態になっているので驚きましたよ」

視線を左右にやって、この状況を認識していることを伝えたと、そこらじゅうに住民が倒れこんでいる様子に顔色一つ変えることなくただ事実を述べる態度で言葉を口にする。

慌てもしない様子に不審を覚えるも咎める前に制されるように言われこちらが物が言えない。

申し出を断ろうにも、確かに人手はあれば助かる。

男にエイリスを任せるのではなく、こちらの住民たちを運ぶのを手伝ってもらいたいところだが生憎とそういうわけにもいかない。

住民たちにかけられた術の取り外しと体調の確認、治療など成すべくことがグワンやガリオンにはあり、今回の依頼に関しての話は後でいいといえどもハセには街の詳しくない部分での案内してもらわねばならないし住民の照合もあるからだ。

三人とも手が放せない。

かといってエイリスをこのままここに置いておくことも気がかりだ。早く寝台で休めてやりたい。土の上で座らせておくわけにはいかな

い。

またエイリスは巫女の身の上であるためにグワンによって宿屋にその身を転移させることはできない。

聞けばこの男は司書だという。

言っていることにも破綻が生じているわけではない。

この落ち着きようは気になるが、元からそういったことで慌てたりしない性分なのかもしれない。

もしも一般の良心的な人物であるだけならば、ここで頑なな態度をとり続けるのも考えものだ。

だから迷ってしまう。

今まで関わっていたこの件が解決したとはいえ、済んだ事の後いきなりその場に現れて、前触れもなくそんなことを言い出すものだから何者かという怪しんでしまうのだが決定的なところは何一つ見せない。

男の心は乱れることなく、ひたすらに安定している。
ただの親切心か。

こちらの心が疑心暗鬼に駆られているだけなのか。
けれども、妙にタイミングが良すぎやしないか。

胸中で論を繰り広げるが、明瞭なことはわからぬまま。
それを見かねたエイリスが言う。

「グワン、ガリオン、ハセ。悪いけど、この場は任せたわ。私は一足先に休みをもらうことにするから」

「しかし」

「私がこのままここにいても、きっと気が散ってしまうでしょうし。

確かに私には少しばかり眠りが必要みたいだしね」

左手で口元を隠して、ふわああとわざとあくびをして見せる。より本物らしく見せるためにあくびに合わせて両目を細めてみる。軽く首を振って眠気を払う仕草をすると、エイリスは言った。

「私のことは気にしないでおいでいいわよ。いつまでも地面に彼らを寝かせておいては可哀そうよ。三人は早く街の人たちを家に運んであげてちょうだい」

強気に言い放ち、ひらひらと片手を振る。放っておいて、と意味する動作だった。

言外にもうこれ以上言うな、というのを感じ取るとあきらめるを得ない。

三人は首をすくめたり、目を合わせたりしていた。

周囲の状況が半ば強制的にはあるが、意見が固まったのを見て男がエイリスを促す。

「では、行きましょうか」

「ええ、よろしく願いますわ」

そうしてエイリスは心配げに見つめる三対の瞳を背に感じながら、その場を男に抱えられて去ったのであった。

厳しい表情で、男を睨むグワンの姿を見ることがなく。

廻り出す不穩の輪・7

司書と名乗る男に横抱きされたまま、しばらく街中を進んでいくとひらけた広場に近いところに出た。

あの場を去って、二人だけになってしまつと双方口を開くことはなく、場は沈黙が支配した。

静寂に身を任せてたエイリスだったが、前を見据えたまま言った。

「もう歩けるからいいわ」

歩みを止めた男の胸に柔らかく片手をついてとんと離れるようにと、軽く押す。

そのままひらりと相手の腕から抜け出て、地面へと足を下すが、そこへ投げかけれた言葉に眉根が寄る。

「やっと巡り会えたのに冷たいよね」

「どついつことよ」

声に振り向けば嘆息交じりのそれは親しげで 否、馴れ馴れしい。

まるで、随分と前から自分のことを知っているみたいだ。

やっと巡り会えたって何のことだ？

図書館であつてからのことか。それよりもずっと以前からのことを指しているのか。

エイリスは不快であることを隠しもせずにした。

さつきからこの男にはイラつきを覚えてしょうがない。

わかりそうでわからないものに、自然とそうなる。

もちろん、男の馴れ馴れしい態度も一枚かんでいるが。

最初に会ったときからどこか気にかかる。

目線か？ それとも言葉？ もしくは存在？

何もかもあてはまりそうで、何もかもが異なるこの感じはなんなのか。しつくりこない。

会わないからこれっきりと思ったら、ここでまた会うことになった。怪しい者と積極的にかかわりあいたいわけではないが、このままにするには落ち着かない。

いちいちこんなことで気に揉むのは疲れる上に性に合わない。いいかげんにはつきりさせたいのだ。

三人がいたあの場で、あのままでは埒が明かないと思ったし時間の無駄だと考えたのでエイリスはわざとこの男の誘いに乗ったのだ。

キツと鋭くにらみを利かせる。

不愉快だと言わんばかりのキツイ視線に男はめげない。

むしろその挑戦的な視線を受けて楽しそうに瞳に強い光を宿す。

男の口がゆつくりと歪みを覚えるように動く。

そう、それはとても恐ろしいほどに遅く感じられた。

エイリスは自分の足元が揺らいでいないか心配になった。

「恋人に向かって、それは酷くない？ - - - 美神^{みかみ}」

「な、んで」

「知っているのかって？ それはわかっているはずだよ」

その名を聞いたとき、日頃意識をせずに行っている動作でさえ難しくなった気がした。

息をすることですら苦しい。
何故？

言葉を返さないエイリス、否、それに重なる存在である美神に、男は語りかける。

「覚えているでしょ。ねえ美神」

ただじつと男の瞳を見つめる。
瞬きすらできない。

本当に自分が存在しているのかさえ曖昧になりそうな緊張。

「待っていたんだよ、ずっと」

呼吸すらも忘れそうなほど。息苦しい。
体中に巡る血が沸騰しそうだった。

「長い間、ずっとね」

張りつめた緊張。震える唇。
けれど、それは。

「美神、愛しくて憎いあなた。どうして私を置いて行ったのかしら？」

わかっていた。

でも、わかりたくないと考えまいとしていた可能性。
嗚呼、どうして……。

「なんで、お前がここにいる！？」

やっと答えてくれた、と微笑を浮かべる。
その者に重なる面影。

かつては運命を共にしたともいえる存在。
まだ私のことを覚えていたのか。

「あなたに会うためだよ、美神」

「お前は輪廻から逃れられないはずだろう!？」

叫ぶように言う美神を目の前に、さらににつと唇の端を吊り上げる。
あの司書である男の笑い方ではない。

いや、そうではない。あれの方が偽りのものだった。

この男を胡散臭いと感じていたのは当然だ。今までのものが仮の姿であり、隠していたの方だったのだから。

愉快気に彼の存在は、言葉を放つ。

美神に重圧を与える言葉を。

「私も取引をしたのよ。あなたに会いたくて」

かつては愛した女。

それが今は男の身となって現れる。

長く遠い時と空間を超えて。

これがどれほどのことが、大抵の者には想像がつくまい。

廻り出す不穩の輪・8

「あなたが女に生まれ変わったと聞いて私は男になったのよ。まあ僕は君が女でもいいと思うけど。君が君のままできてくれて嬉しいよ」

過去の声が現在の声と重なる。

耳の奥でよみがえり、こだまする。

二つの声。二つの異なる姿。

今、本当に接しているものがどちらのものなのか、混乱しそうになる。

まつ毛を小刻みに震わせ、瞳が動揺に揺らめく。

無意識に、記憶の中の姿と目の前の人物に相違点を探してしまう。

違うと思って安堵したいのか。落胆したいのか。

それすらもわからない己の愚行。

最近眠れないと思っていた。

それは夢を見るから。

その夢は本来あるべき自然に見るものだったか。いや違う。あれは故意によるものだったのはなかるうか。

あまりにも生々しい記憶。

今までは触れずにいた、閉じ込めていたものを目の前で暴かれたのだ。

不自然だと認めることすらできないほどの苦痛と悲哀。

翻弄されるしかない己の矮小さが情けないほどの後悔を生む。

判断が鈍っていた。

そう結論を下そうとして、理性が言う。
違う。自分で目をそらしていたのだ。

本能ともいえる部分が、恐ろしい可能性を考慮することを恐怖して
いたのだ。

わかっていただろう、ともう一人の自分がささやく。

認めてしまえば、崩れてしまう。

今や、不安定なほど脆い己の人格。

守るために、殻に閉じこもっていた。

これ以上の刺激は、崩壊の一途をたどるだけだと頭の中で警告音が
鳴り響いていたから。

「私にあれをみせていたのはお前かっ!!」

最近どうも嫌な夢を見ると思っていた。

その原因はこの者にあつたのだ。

本当は聞かずともわかる。

あれを知りえるのは私と彼女だけなのだから。

己が今、瞳に浮かべるものは怒りか憂いか、後悔か。

叫びに混じる思いは、激昂か、悲痛か。

嵐のような感情の中で、思いは一つとは限らない。

でも、どれが一番多くを占めるのだろうか？

「ふふっ」

向けられるあらゆる感情が心地よい。

会話も交わせない。声を聴くことも、顔を見ることさえ出来ぬ日々の中でひたすらに恋い焦がれた。

狂うような日々だった。

そして実際、狂ったのだ。

心に抱いていた想いは強くて、一人で抱えるにはひたむきだった。それが大き過ぎた。

狂気ともいえる時間の中で、孤独でいるには長すぎてしまった。

もう後に戻ることもできなかった。

また時空によってもたらされた歪みは闇に魅入られたのか。より一層、強まり魔の色を宿した。

これは、この世の混沌の神との契約なんだよ。愛しい美神。

心でも絶えず語りかけ、瞳は一心に映す存在を見つめる。

全神経で彼女を、彼を、かの魂を、感じ取る。

こぼれる笑みが止まらない。

仄暗い歓喜がこの胸を焦がしている。

ようやく再びまみえたのだ。

巡る狂気の淵にあなたも立てばいい。

そして背中を押してあげる。

不穩の輪の中にあなたも共に堕ちていくと良い。

手を取って、かたく抱きしめていてあげるから。
一緒に全部を味わって？

この世のなにもかもが愉快だと言わんばかりの楽しそうな目の前の人の姿。

エイリスはなにもできずに、ただ見つめている。

どこかで爆発する音を耳が捉えるも、音のする方に振り向くことはない。

そんなことはせずとも、燃え上がる火は視界に入る。

その炎がはぜる光景は対峙する目の前の人の、背の向こうにあるから。

燃える炎を背に嫣然と微笑む。かつての恋人の姿は。
壮絶・・・・・・の一言に尽きた。

双眸が昏く色めいて、その中に鋭い光を浮かべる。

唇は両の端から吊り上り、自信ある笑みの形に。そして、あかく染まる。

陰影が深まり、形作られる圧倒する気配を知って、ただ息をするのでさえこんなに大変だなんて。

「こんなに驚いてくれるなんて嬉しいわ。久しぶりの再会だもの。まだまだお話ししたいところ……。だけれど、後で時間はたっぷりあるのもの。お楽しみは後に取っておくことにするわ」

エイリスのそんな様子を見て機嫌よさそうに、嗤う。

それは魔に魅入られた者の姿にふさわしい仕草であった。

不本意なことに、そうなくてもこの者は美しい。あこのころのまま。目に焼き付いた人影が被る。

「ああ、だけどあんまりあの男たちと仲良くしてしまわないでね。嫉妬してしまうよ」

「……何を言っている」

「愛しい美神。私のものよ。指一本、髪の毛一筋まで私のものなのだから、誰かにあげては駄目よ。もし、そんなことをしたら相手を殺してしまうから」

二度とあなたの目に触れないように。魂までも粉々にして。

男の声で、次いで女の声で告げられる。

魅惑の声がエイリスを、美神を惑わし、揺さぶり、振り回す。

当惑した状態で、何もなすことなく、ただの受け身となっている存在に笑みを与え続ける。

言葉をしみこませるように、語ることを惜しまない。

「ねえ美神でありエイリスであるあなた」

どこからか馬を呼び寄せ、ひらりと軽やかそのもので舞うように、

それに跨る。

馬上の人となると美神の髪を一筋掬い取り、視線は合わせたままで口づけて微笑んだ。

「忘れないでね」

呆然となっている美神に背を向けると東へ馬首を向けて駆け行く。

「王都にて、会いましょう、巫女様」

そう言い残して、去っていた。

崩壊、そして再構築。(前書き)

遅くなりましたー^^;

崩壊、そして再構築。

「あ……や、めろ」

苦しい。息が詰まる。

身体の自由はきかず、思考はまとまらない。

自分はどこにいるのか。自分は何なのか、わからなくなる。

何のためにこうなった？

己の名前は何というものだった？

混濁する意識に、交じり合ういくつもの記憶。

「くっ、あ、あああああ」

きしむ背中。焼けつくような痛み。内から崩壊させるような気分の悪さ。

これは現実か。それとも幻か。曖昧になる境界線に惑わされるままになる。

「ああっ、あ、あああああ」

呻くどころか、それはもうほとんど叫びだった。

のどの奥から迸る、苦痛に色濃い声。

無意識にこぼれ出す。とまることなく。

エイリスのいる部屋に暗澹とした雰囲気がちこめる。

まるで彼女の心にある不安や恐怖の虚像が具現化して空間を支配するように、重く圧する。

それを払しょくするように、そっと大きな掌がエイリスの額に乗せられた。

「……………っ、あ」

当てられた掌は冷たくて、熱くおそれに慄いていた体は息をふつと取り戻し、「はぁ」と吐き出す。

「そうだ。ゆっくりと吐き出せ」

言葉に従うように体は激しかった呼吸を徐々に平常へと戻していく。

「ためるな。清らかな気を取り戻せ」

うすばんやりとした状態でも、耳に届く声は聞き覚えのあるもの。目を閉じ、いまだ頭は朦朧としたままであるが、エイリスは誰がそこにいるのかわかっていた。

「ぐわ、ん……」

己が横たわる寝台のすぐそばに、グワンはいた。

椅子に腰かけたまま、グワンは柳眉を寄せてエイリスを心配そうに見つめる。

「気が付いたのか」

体を蝕むような熱が弱まってきて、やや自由を取り戻したエイリスは、重い瞼をゆるゆると開けた。

視界に映る、グワンの顔。

けれども、同時に重なるのは脳裏に映る別の人だった。

その名を口にする。

「俱珂^{ぐか}」

「……思い出したのか」

一瞬だけ動きを止めると、大きく息をついてグワンの肩が動く。

「顔は変わらないのね」

「ああ。私の姿はあまり、あのころと変わらん」

「名前は？」

「この界に生まれ落ちたこととともにその名を使う機会は逸した。

今ではそれは真名みたいなものだ。この魂に刻まれた一つの名にすぎんがな」

「そう、じゃあグワンと今までどおりの名前で呼んだ方がいいのね？」

「そうだな。……まあお前にならどちらで呼ばれようとも構わない。好きに呼ぶがいい、美神」

呼ばれた名前に、霞がかった意識が一気に覚醒する。

先ほどまで思い出したばかりのものをなぞるようにゆっくりと辿っていた思考。そうやって、ばんやりとした記憶を追いかけることを

していた。

それを一旦放棄して、明瞭とした現実へ目を向ける。

「ああ、そうだったわね。矢紅に会ったんだったわ。ここまでの人、きてしまったのよ」

諦めたように深く嘆息する。視線は窓の外へ向く。

今は夜。深い闇の色に何もかもが閉ざされる。

今夜は雲が濃いのか、星が見えない。

「あいつの妄執もなかなかしつこいな。……だが、まあ我も人のことを言えたものではないがな」

珍しくグワンが苦く笑う。己も似たようなものだと思っているからなのだろう。

「あなたは どうしてここにいるの？」

それは自分にも問いかけたい、けれど答えの見つからない謎。

「そんなことは決まっている。お前に会ったためだ、美神」

「私？」

「過去、決して不幸せだったわけではないが、お前をこの腕に抱くことはできなかった。それが後悔。それが悔恨」

「……………」

「最期、祀られた中で我は思ったのだ。必ずや来世、美神と結ばれるとな」

「俱珂」

「幸い、我は勤勉に祀り上げられることを務めたからな、神力も高まり、位は高位にあつた」

「願いをかなえる力があつたのね」

「ああ。だが我の魂が長い時を経てようやく次の転生が叶うとなつたとき、お前の魂はすでに何度も転生を繰り返し、次はこの界へと参ることになっていた」

「……………そう」

思い返せば、自分の記憶は随分とたくさんある。

一人のものではない。

あたゆる生き方、あらゆる考え方を感じさせる複数もの人間けれど
同一の魂が得た記憶。
そして今生のもの。

「お前を探していた、美神」

崩壊、そして再構築。 2（前書き）

グワン（俱珂）とエイリス（美神）の過去編に入ります。

崩壊、そして再構築。 2

遠い記憶のあなたにあるべき過去の人との出会いが、エイリスの記憶をある程度、復元させていた。

本来ならば、あつてはならぬ邂逅。

それを成し得てしまえば、あとはなし崩しだった。

エイリスの魂が覚えている記憶は、無理やりに遠ざけたものが多く、整序あるものではなかった。

よって、乱雑に積み上げられた記憶の一か所が崩れてしまえば、断片は降り注ぐように一気にエイリスの中に舞い戻ってきた。

もともと揺らぐ部分のあつた記憶だ。

人格の形成は曖昧で、確固たるものはなく不鮮明な自我を抱えていた。

当然ともいえる流れであつた。

不安に陰ることもあつたエイリスの心。

しかし、闇に吞まれ過去をも思い返せば、いつも身近にいた人の存在に気付くことになった。

真実は己の中に常にあつたのだ。

混沌に埋もれていただけで、吹きすさぶ嵐が去れば大切なものは見えてくる。

エイリスの胸中は今、急速に安寧を取り戻しつつあつた。

「我はお前とともに在るために、ここにいます」

グワンの声が身体にしみこんでいき、知らず安堵の息をもらす。

肩の力を抜けば、自然と顔を上げることができた。

己の目に映るのは、いつも傍にあつた顔。

真摯に見つめられるその瞳は、かつてのものと変わりなく懐かしさすら感じ得る。

あのときも、そうだった。

目の前の人は、不安に揺れる中で信じるものをなくした己に希望を

与えてくれたのだ。

強い意志を持って、美神を導いてくれた。

「今こそ、誓いを成そう」

二人だけの空間に、声は朗々と響く。

「今度は、もう二度と、離れない」

「・・・・・・ありがとう」

グワンは前世、鬼という名の異形であった。

その姿は美しく、雅で見るものすべてを虜にしまうような妖し
げで艶やか。異形の身にふさわしく魔力でも秘めたるのかと疑って
しまいたくなるほどの美貌であり、魅了するものだった。

そのときの名を俱珂、という。

時は平安。

彼は古より一族の暮らす鬱蒼と茂る木々に守られたひっそりとした
森で静寂とともに過ごしていた。

多くの土地を支配する人間に畏怖される存在である鬼は人の世界に
干渉することなく、ただ自然を慈しみ、四季に流れるままに生きて
いた。

大それた力はなく、この世を支配せんとする欲もなく純粹に命とい
うものを愛していた。

人とは異なり、長命である彼らは賢く、無益な争いを好まなかった。
ゆえに排他されるとその数は一気に減少した。

理解できないものは恐ろしい。

そう口々に言つて、思つて人々は鬼に対しての恐怖の根を心に宿していた。

人間の心は畏れに弱く、恐怖と隣り合わせに生活することは罷り通らなかつた。

自分たちが老いる時も鬼は若く麗しいまま。

自分たちが美醜様々であるのに鬼は皆、美形である。

自分たちがわからぬことも鬼には一片のかけらで百の答えを見つけ出してしまふことができる。

あまりに超越が過ぎると人々の心は敬いよりも畏怖が勝つた。

種族の違いと納得するにしてみれば人と鬼の体のつくりはとても近い。

優れた技量を前に無意識にでも比較を許してしまうとそれは人間側の劣等感をいたく刺激してしまうのだつた。

鬼の一族は人間が畏れるほどの美貌を持ち、また長寿であり知識を兼ね備えていた。

聡明であるがために、鬼の一族は人間側の心情さえも慮ることになり取られた打開策が人の世から姿を消すという選択肢であつた。

むやみに人を傷つけることを好まず、不安を与えることを厭う。

もちろん己が種族の命が消えることも避けたい。

しかし、憎しみは何も生まない。報復の後に残るのは虚無にすぎない。

長すぎる生の過程でわかりすぎるくらいに理解していた彼らはこつそりと生活基盤を移し徐々に世の中の表舞台から消えていった。

そうして古より存在しうる鬼の一族は今や時とともに少数一族となり、畏れにかたまつた心を人間に与えないように限られた自分たちの領域のみで十分に満足して住んでいた。

俱珂もそのような鬼の一人であつた。

きつとこのまま静かに時を重ねて、いずれは一族の中から伴侶を選

び歴史の一頁ともならぬ一族の系譜に名を載せる命を残してこの世を去るのだらうと漠然と思っていた。

別に俱珂は悲観的であるとか不満を持っていたというわけではない。ただ現状を受け入れ、そういうものであると考えていた。そして、それに満足していたのだ。

一族の大抵はそうであつたし、同じように平常というものを大事にしていた。

けれど他の一族との違いが俱珂には一つだけ出来てしまった。

小さいが、その一つが大いなる波紋を生んで、俱珂のその後の人生を大きく変えることとなる。

俱珂は出会ってしまった。

己の価値観を、今までの人生観を変えてしまうほどの衝撃的で運命的な出会いには、第三者の視点に立ってみると大変、平凡な形でなされたのだった。

崩壊、そして再構築。 2（後書き）

当初から好きな設定つめこみまくりなので、伏線をはりまくり。やっと思わせるって感じなのですが、長くなりますかね、はて。

まずはグワンとの過去編です。いずれはあと二人も出したいし、現状も進めたいのですが、まずは平安編？をお楽しみいただければ幸いです^^

出会い（前書き）

過去編の続きとなっております。

出会い

森の入口付近で音を耳にしたとき、俱珂は泉に入っていた。

滴る水をそのままに耳を澄ませば、奏でられるは優美な音色。

管弦や美術といった芸術にも秀でる鬼の一族である俱珂はもちろんあらゆる高尚なものに精通していたが、その俱珂でさえも身を委ねたくなるような音。

決して技術的に高いといえる部類のものではなかったけれども、やわらかな音の調べは聴く者を穏やかな心地にさせてくれた。

聞いたことのない曲であったのだが優しく甘やかな笛の音色に不思議と聞き入ってしまった、俱珂は気持ちよく目を閉じた。

濡れた肌にかすかにあたる太陽があたたかく、木漏れ日が美しい春のことだった。

美神は苛立っていた。

「もーなんなの！　ありえないわっ！　あー腹立たしい。腹が立って仕方がない。不愉快すぎて」

ずんずんと歩いていく足取りは確かな方向へ向かっているとかわせるものだったがその実、行き先は決まっておらず、結果、

「あら、ここはどこなのかしら？」

足を止めた美神は完全に道に迷っていたのだった。

はたと気づいてあたりを見渡せば、見覚えのない景色の広がる森。すっかりと前を向いて歩いていたのだけれど、目で受け取る情報を自然と処理していたらしく美神は全く知らない土地に足を踏み入れていることを悟った。

「しまったわ……」

がくりとその場で力なくうなだれると、はああああと大きくため息をついた。

またしてもやってしまった、と後悔するもあとのまつり。

美神は一人考えようとすると、途中で放棄した。

「こうしたままでいても、しょうがないわね」

下を向いていた首を起こして、前を再び見据えると肩をすくめた。

美神は気分を切り替えようと深呼吸して、森の醸し出す癒しの空気を思いつきり肺へ吸い込んだ。

「さて、と」

先日も一人歩きをして、全然知らない場所に出ってしまった美神はやみくもに歩き回った結果、状況はさらに悪化することになった。

というわけで前回の教訓を踏まえて、美神はおとなしく道がわからなくなった時点で安易に動き回をやめて腰を据えることにした。

ほどよく木陰ができている適当な岩場を見つけると、衣が汚れるのも構わずその場に座り着物の袂から巾着を取り出した。

「なににしようかしら。……やっぱり、あの曲よね」

美神の白魚のような手には巾着から取り出した横笛があった。木でできたそれは素朴でありながらなめらかな感触で、とてもしっかりしていた。

美神の唯一持っている楽器であり、お気に入りの笛だった。

ふっと美神が息を込めると、笛はやわらかな音の調べを空気のにせて彷徨いだす。

たおやかな指先が軽やかに動く。

美神は瞳を閉じて一心に笛を奏でた。

木々はそよぎ、小鳥は飛び交う。水面は風に揺れ、大地は日に照らされる。

森の中で一人、無心になって美神は笛を吹き続けた。

なにもかもを忘れるように。この世に自分以外のものはいないかのようは無意識の空間を作る。

心にたまったものはすべて流れて清らかなものに吸い込まれてなくなっていくように、ただひたすらに、静かに願う。

そうして森の静寂と音色のみの世界に、自分の気配すらも空気に溶け込んでいくように感じていた。

主体は笛の音色であって、それを吹く自分は補助者にすぎない。

薄れていく心のもの。美神の気配。

それに満足する。

曲を奏でることに夢中になって、己の内が空っぽになるまで美神は休まなかった。

ようやく心がすっきりとした感を得たころ、美神が目を開けると時はすでに夕刻であった。

西の方に日が沈むのがわかる。

元のように笛を巾着にしまい、衣の袂に入れると腰かけていた大きな岩から身を退く。

地面に二本の足をつけると視線を落としていた美神に影が差す。

違和感を感じて顔を上げる。

すると目の前には、何者かがいた。

それは艶やかな銀の髪を持ち、肌触りのよさそうな衣を身に着けた美しいかんばせを持つ者だった。

「誰？」

思わず口をついた問いを発すると美神はかたまった。

涼を運ぶ夕方の風に髪をあそばせながら、その者は言った。

「娘、名をなんという？」

とてもきれいな微笑を浮かべて。

夜の森を抜けて（前書き）

案内役の俱珂と迷子の美神。

夜の森を抜けて

白銀の髪が夕日に朱く煌めく。

この世のものとは思えない美しい造作をした目の前の存在に美神は完全に圧倒されていた。

驚きに口の中がかわいて、からからだった。

黄昏の刻。

別段、普段は思い出さない言葉が脳裏に浮かびあがる。

それはこの世のものではない生命を持つ者らとの邂逅がかなうとき。

通常は、この時刻であれば人々は既に家路についている時間だった。

「……誰なの？」

こわばった表情のまま、ようやく口にできたのはその言葉だけだった。

ぎこちなく唇を動かすだけでも美神は相当の神経を消耗してしまった。

「我は笛の音に惹かれてやってきただけだ。奏者の名が知りたい。お前の名はなんという？」

「……美神よ」

数秒の逡巡の末に美神は小さな声で、けれどはっきりと聞き取れるほどの声量で答えた。

名を知りえた俱珂は口元の両端を引き上げて、満足そうに笑みを浮かべる。

「そうか、美神というのか。我はこの区域にいる。またくるかい」

「え？」

「ではまた」

言いたいことを言っていると俱珂は立ち去ろうとくると身体の向きを

変えてしまう。

足音はしないのに歩みは早く、美神の視界に映るその姿はどんどん小さくなっていく。

いきなり現れて、またこいと告げられて、取り残された美神は戸惑う。

けれど驚愕に固まった頭がゆるやかに稼働し始めるころには、はっとして「ちよっと待って！」と遠ざかる影に叫んだ。

「なんだ？」

既に後ろ背を向けていた俱珂は立ち止まり、美神の方へと首をめぐらす。

「お願い。出口まで連れて行って」

「なんだお前。道に迷っていたのか」

「う……………。そうなの、よ」

道すがら、並んで歩く二人。

この年齢にもなって迷子を認めるのは美神の自尊心が許しがたいとしきりに叫んでいたのだが、認めないことにはどうにも進まない。葛藤に苦しみながら、美神は道に迷っていた旨を告げた。

「それならば早く言えばいいものを。人の子がこのような場所にいるのはおかしいと思ったが、やはりそういうわけがあったのだな。

我も気づかなんだわ」

一目で見分けのつかぬ同じような景色の続く森の中を慣れた様子の俱珂はすいすいと迷いなく歩を進めていく。

道を覚えようにも、うつかりまた迷子になるのは避けたい美神は周囲に視線をやることなく必死に俱珂の歩みに後れを取るまいとしていた。

「笛の音がお好きなの？」

「いや。嫌いではないが。気まぐれのようなものだ」

「きまぐれ？」

「我は飽いたのだ」

道中、何も言葉を交わさないのも気詰まりなので美神は話をしようとして話題を振る。

だが、会話はかみ合っているのかいないのか。相手に質問の内容が通じているのか、それすらもよくわからないままに過ぎた。

結局、問いは更なる疑問となって美神に返ってくるだけだった。

よくわからない人ね、と心内で美神は思った。

そして、半刻ほど歩いたところでようやく、人家の明かりが見えてきた。

小さいながらもめれ見える灯りは確かにこの世に人が存在するのだと知らしめていた。

人の気配から遠ざかり、しばしの時間と空間を自然と人間離れした存在のみと共にしていた美神は己以外に確かに存在する人があることに無意識に安堵し、緊張にこわばっていた肩の力がするりと抜けたのだった。

歩き続けて、はっきりとした境界線はないけれども人とそれ以外の存在を分かつてであろう、森の気配が薄らぎつつある場所に出る。

こうして二人は、森の出口ともいうべき場所にたどり着いた。

「ここまでくればあとは一本道だ。帰り道はもう大丈夫だろう？」

「ええ、おかげさまで助かったわ。ありがとう」

美神は自分より頭二つ分は長身である俱珂を見上げて、淡く微笑

んだ。

辺りはすっかり闇に満ちている。普通であれば薄暗くて明かりもないこの場所では話し相手の表情はわかりずらかろう。

しかし、俱珂にはそんなことは関係がない。

視界にしっかりと美神の表情の機微をおさめると自身も口の端をわずかばかり上げたのだった。

美神にも俱珂のような目があれば、それが見えたであろう。

哀しみに滲む何とも形容しがたい見る者を切なくさせるような笑みを。

けれども実際には見えないものは見えないので、美神がそれに気づくことはなかった。

別れを感じさえる空気の中、俱珂は唐突に感じさせる言葉を告ぐ。

「ここには誰にも立ち入れない」

「そうなの？」

「ああ。お主は入れたようだがな」

「？」

歩みを止めていた美神は困惑顔のまま、隣に立つ俱珂を見つめる。闇の中でも俱珂の銀髪はぼんやりと浮き立つので、夜目の利かない美神にも俱珂がそこにいることが何とか判別できた。

「不思議なこともあるものだ」

何を思うのか。

俱珂の心境などに思いもよらぬ美神はただその言葉を耳にするだけだ。

そこから何かを導き出すこともできず、声は受け止められ吸い込まれる。

不思議な、胸に何か引つかかる感じを解けないままに。

「そうだ。これをやろう」

どこからとりだしたのか、俱珂から差し出された掌にはきれいな包み紙が載っていた。

「演奏の礼だ」

美神の手を取り、載せられた包み紙をそつと開けて、顔を近づけてよく見てみると中身は杏子の砂糖漬けだった。

ふわつと芳しい匂いが夜にとけていく。感じる甘さに心が和んだ。その様子を見て取った俱珂がふつと笑いをもらした。

「女子は甘いものが好きだろう？」

闇がささやくような優しい声音と、思わぬ可愛らしい贈り物に最初の緊張はどこへ行つたのか、美神の心はすっかり解れていた。

「ええ。ありがとう」

「ではな」

別れの頃には、少し寂しくなるほどに。

夜の森を抜けて（後書き）

過去編はもう少し続きます。思ったより終わらないので^^；

社に帰って（前書き）

今回は俱珂の出番はないです。美神の住んでいるところメインです。

社に帰って

美神が社に帰ると、その姿を見咎めた清瑠が逃すまいといった怒気を上げて近づいてきた。

遠目でもわかる。

清瑠が目じりを吊り上げて、口の両端をへの字にしているであろうことが。

美神は思わず逃げの態勢をとるが、それよりも徐々に近づく清瑠の方が早い。

「美神っ!」

「わわっ、清瑠!」

それに逃げ出そうとするにもここは一本道の廊下である。後ろに行くか前に行くしかないわけで、その上障害物も何もないところで目ばしい隠れるところはなかった。

「こら、美神! 逃げるな!」

「あーあ」

周囲を見渡し駆けだそうとした足をその場に縫いとどめて仕方なく、腹を据える。

これからお叱りの時間であることが間違いないと予感された。憂鬱なことこの上なしであった美神は心底ため息をついた。

美神と長年の付き合いになる清瑠は口を開くと勢いよく言葉をぶつけた。

「あんたね! 今回はまたどこにいったのよ! こんな時間まで!」

「うっ、ごめんなさい」

「心配したんだからね! また道にでも迷って帰れなくなったのかと」

「あ、えっと、そのー」

「何? まさかまたなの!」

美神が言葉に詰まった途端、ただでさえ鋭さを帯びた眼差しが更に胡乱気となる清瑠の目つきに、これ以上事態を悪化させまいと美神は慌てて取り繕う。

「い、いえ。大丈夫でした」

「もう少しで人を捜しに行かせるところだったわ。一体こんな時間まで何をしていたのよ？」

「ちよつと笛を奏でていたら時を忘れてしまって……」

嘘は言っていない。嘘は。

内心でそう呟きつつ、背筋を冷や汗が伝うのを美神は感じた。

清瑠がぷりぷりと怒りながらも忙しいのだろう、不本意な様子で話を切り上げようとする。

「もうっこれからは気をつけなさいね！」

「うん。わかったわ」

ほっ。これで解放される。

安心して夕餉に向かうと一歩踏み出した足だったが、清瑠に振り向きざまに言われて動きを止めた。

「あっそうだ、美神。大神官様が呼んでいたわよ。あとでいらっしやいって」

「……そうなの？　ありがとう」

口元を引きつらせながら、美神は礼を言っ て足を向ける方向を変更した。

食堂から大神官のいる部屋へと向かう重い一歩をゆっくりと磨き上げられた廊下に下ろす。

「はああ。またお説教かあ」

がつくりと頂垂れた美神の背は心持ち猫背に丸くなる。

それをすぐさま擦れ違う年嵩の者に「背筋はまっすぐ！」と声をかけられ、ばしんと叩かれた。

「い、」

力いっぱい叩かれた背中が痛い。

容赦ない一撃に、顔を歪めて美神は足早に大神官の部屋に行く。

のっそりとしていた歩みは次第に早まり、最後には駆け足のようになった。

「もうこれ以上何かあつてたまるもんですか」

その急いだ美神の足さばきを誰にも見られなかったのは運が良かった。

もし見つかつていれば、「廊下を走るな！」と言われていたことだろう。

「うう、早く部屋に帰りたい」

泣き言を言いながら、美神は進んだ。

「美神よ」

「はい」

場所は先ほどとは打って変わって厳肅な空気が漂う大神官の部屋であるうちの一つの居室。

美神は緊張と空腹に眩暈を起こしそうになりながら大神官の前に正座していた。

お腹が空きすぎて腹の虫が暴れ出さないか心配しつつ、むしろそうなら早く部屋に戻るのではないかと美神は考えていた。

身体よりも先に意識が逃げ出そうとしていた美神に大神官は言葉をつぐ。

「また無断で社から抜け出したそうですね」

「……………はい」

何の感情もこもっていない否、感情を悟らせない大神官の声音に美神は胃が痛くなりそうになる。

早く早く早く早く！ 終わって！！ と胸中で必死に願うが、美神の望みに反して大神官は話し続ける。

「あなたももういい歳なのですから、いい加減に落ち着きというものを覚えなさい」

「はい」

じくりじくりとお小言を食らう説教を美神は大変苦手としていた。恐らく得意な者などいないと思うが、話を流すように聞くこともできない美神は言われる一言一言に肝が冷えそうになるのであった。「大体なんですか。人に心配をかけて。清瑠なんてしきりに心配して気が散っていましたよ。他者にまで迷惑をかけてどうするのですか」

「申し訳ございません」

ああ、本当に悪いことをしたなあと美神は内心で思った。

けれども同時にまだどこかで心配をかけるようなことをしてしまう自分がいるのだとわかってもいた。

「あなたもこの社に住んで長いのですからしきたりは知っているはず。むやみやたらに勝手な行動をとるものではありません。皆、規律を守って生活しているのです。あなた一人の行動の乱れが皆につながっては困ります」

「すいません。以後よく気を付けます」

説教後や翌日、さらにその後はどうなるのかはともかく。今は反省の色濃い美神は深々と頭を下げて謝罪した。

「誠に申し訳ない行いをいたしました。以後、真心を持って誠心誠意の行動をするように心がけたいと思います」

向かい側で、それを見ていた大神官はかすかにため息をつくと言った。

「いいですか、美神。あなたは巫女なのです。巫女なら巫女らしく己の分をわきまえ、神前に祈りを捧げ、毎日の鍛錬を欠かしてはなりません。どんなことがあるうと」

「はい、心得ております」

そうはつきりと言う声を耳にしながらも、大神官はこの子はまた約束を破るのではないだろうか、と懸念していた。けれど信じるのも道の一つ。

美神が己できちんと悟るまでは導くことしかできぬと弁えてる大神官は仕方がない、と苦笑いを小さく浮かべると美神に退室を許可した。

「お腹が空いたことでしょう。命に感謝して召し上がってきなさい」

「はい。ありがとうございます。失礼させていただきます」
出てきたときと違って足取り軽く、美神は部屋を後にした。

それに対して大神官は部屋の窓から垣間見える裏手の雑木林を目に映して、憂慮をその顔に浮かべていたのだった。

訪問（前書き）

お待たせしましたー！
今回は俱珂側のお話となります。

訪問

がさり、と庭の草むらが音を立てる。

その音に反応して、己が耳をピクリと動かすと、美しい女の姿をした者らがいつもの無表情のまま敵を待ち受ける姿勢へと入る。

それを声に出さずに視線のみで、必要ないと諭すと訪問者に声をかけた。

「久しいな、鬼の」

「晴明、邪魔をするぞ」

庭先から現れた俱珂は、そのまま真っすぐに歩いて縁側に腰掛けた。式神たちに茶を出すように言つと、晴明は広げていた仕事道具をしまい始めた。

それに目を止めた俱珂が

「氣遣うな。邪魔をするつもりはない。そのまま続けてくれ」

と言つと晴明は穏やかな笑みを口元に薄らと浮かべながらも、筆をしまう手を休めない。

「いやいや、ちょうどこの辺にしようかと思つていたんだよ」

「そうなのか？　ならいいが」

首をかしげつつ、俱珂は納得すると一つ肯いた。

「札を書いていたのだな。捗ったか？」

「まあまあだね。しかし、今日はもう結構書き連ねたから十分さ」

白紙の札に墨で文字を書きつつ、力を込める作業をしていた晴明はほどよく疲れたところだったので、俱珂の出現によつてきりもいいし、ちょうど休憩にしようと思つたのであった。

午後からずっとだったので、いささか目疲れもしていた。晴明は目頭を片手で軽くこすつた。

俱珂は自分が現れた庭にちらりと目を向ける。

「この庭も随分と秋らしくなったものだな」

「ん？　ああ、きれいなもんだろっ？」

清明の家の庭は庭師による手が入った造作ある庭ではなかったのだが、なぜか調和の保たれた庭だった。

自然は各々が自由に伸び育ち、また、それを許されていた。けれども決して他者を害するようなことはせず、むしろその逆で互いが互いを引き立てるようにしていた。

紅葉した葉が、風に舞い散る。

幻想的な雰囲気包まれて、不思議な心地となる。

静かに庭を眺めていると、茶が運ばれてきた。

受け取って一口すすると、口内にふわりとした茶の香ばしさが広がる。

「相変わらず、いい茶だな」

「だろう？」

清明も片手で茶飲み茶碗を掴んで茶をあおるように飲み干した。

「お前、それは茶であって酒ではないんだからなあ」

呆れたように俱珂が言う。と清明はおかしそうに笑う。

「いいじゃないか。のどが渴いていたんだよ」

「もつと味わえ」

「味わった味わった」

適当にあしらいながら清明はあぐらをかいてその上に頬杖をつく。だらしなくくつろぐその様を見て俱珂はいつものように小言を口にする。

「まったく。お前そんな様でよく朝廷で働けるな」

「適当だからさ。頭を力チ力チ言わせても寿命が減るだけだ」

とはいっても、一応公式の場では見る者を唸らせる礼儀作法の美しさを披露する清明だった。

しかし、今はくつろぎの時。

ふわああ、と欠伸をして清明は目を細めた。

「で、今日は何か用があったのかい？」

「いや、特に用といったものはない。ただなんとなくお前の顔を見に来ただけだ」

「だろうと思つたよ」

「だつたら聞くな」

清明の言葉に俱珂は顔をしかめた。それを見て楽しそうに清明は笑う。

「いやあ、しばらく来なかったのに急にやってきたからさ。何かあったのかと思つただけだよ。ほんの一割」

「何も無い」

すつと視線を落とすとすぐにそれを元に戻した。

俱珂の表情に変化はない。

清明はますます楽しそうに笑つた。

「ふふつ君をからかうのは楽しいなあ」

「ほつとけ」

察しの良い清明は俱珂の感情などきつと見透かしている。息をするのと同じようにこの男は人の感情を悟ることができる。頭のいい男だ。それを不気味だという者もいる。

己の感情を手取るように相手に理解される、否、見破られることを恐れる者からすれば清明は脅威にあたいるのだろう。

実際にそういつて清明を避ける者もいる。陰で笑う者がいる。

俱珂はそれを知っている。けれどこの清明という者は、傍にいて不快になることがない。俱珂にとって重要なことは人の評判によるものではなく、己にとつてどうかと言うことだけだった。

だから俱珂は時折、気が向くと清明のもとを訪れていた。

「そうだ、鬼の。たまにはちよいと付き合つてくれ」

「どこにだ？」

清明がからかうような笑みを浮かべていた顔を一転させた。何か思いついたようだった。

また悪巧みだろうか。そう思つてはみるが俱珂は怖いもの見たさで聞いてみたのだった。

「御屋敷にさ」

にやり、と清明が笑つた。

訪問（後書き）

美神は次話で出てきます^^

舞台（前書き）

めぐりあう定め。

舞台

「何ゆえに我がここにこのような格好でおらねばならぬ」

「いいじゃないか。よく似合っているぞ」

顔をしかめた俱珂は今、夜の都にこちらを見つめて楽しそうに肩を揺らす晴明と二人で立っていた。

今夜は満月。

月が二人を夜空の上から照らしている。

「またお前の思いつきに付き合う羽目になるとは、な……」

「ふふつ、鬼の。そう言いつつも付き合いが悪いではないか」

「ふん。仕方ない。今日の我は機嫌がいい。引き受けてやろうぞ」
晴明の言葉に眉根を寄せた表情を一変して、俱珂がふわりと不敵に笑う。

「頼むよ、紗麗」

それは俱珂が人間に名乗る時の名だった。

「晴明が三番弟子、紗麗されいと申します」

「ほほう。これが晴明殿のご自慢のお弟子さんでありますか。…」

…これはまた実に美しいお弟子さんですなあ」

男の眼差しが下卑たものになるのを気配で悟ると俱珂は内心で目の前でふんぞり返る存在を嘲笑う。

それをおくびにも出さないで俱珂は、さらりと流す。

「もつたいないお言葉。本日承ります殿のご依頼に関しましては……」
道中、晴明に聞かされていた口上を述べ、その間も頭は下げたままだ。

鬼が人に下げる頭など本来は持っていないが、今は晴明の弟子という仮の姿。相對するのは晴明より位が上の貴族。礼儀に従っているふりをしていなければ、晴明の面目が立たない。

まあ、この男はそんなこと気にしないだろうが。むしろ逆に面白がりそうだ。

胸中で、そう下して俱珂は皇族も驚くような作法を見せる。

あまりの優美さに貴族の男も一瞬、息をのんだ音がした。矮小な存在と侮っていた者に己も想像しないものを見せられたからである。

それにちよつと心をよくして、俱珂は話を進めていった。

いくつかの話題を交わして。

そうして、上辺だけの会談の席は終了した。

二人だけになると、晴明はからかい交じりの声音で俱珂に言った。

「相変わらず見事なものだ。紗麗、いつそ本気で弟子にならないか？」

弟子と入っても実質、晴明が俱珂に教えられるようなことはないのだが。

「ふん。冗談を申すな。あのような虫けらに時間を食われるかと思つと不本意甚だしいぞ」

「長命の鬼が時間を惜しむほど、か。あの男も嫌われたものだな」
「何を言う。どうせあいつた奴らばかりだろう、お前が相手するの」

「まあそうだな」

肯定する晴明を尻目に俱珂は思う。

さきほどの男だけでなく、そういった輩は以前にも見た。
見下すように晴明を見るその者らの眼差しに気付いてはいたが、

俱珂は何もしなかった。

何故ならば、それを俱珂がどうかしていいものではなかったからだ。

しかし、何もしなかったからといって腹が立たないわけではない。

「怒りの沸点が少し低いね、紗麗も」

「知るか」

清明を背後に、静かに怒気を燐らす俱珂。

二人の影が月に照らし出される。

「お前もよくあんな奴の依頼を受けたな」

「まあ仕事だからね。大体があんな連中だ。避けようとしたら仕事がなくなる」

「お前ならこんなところで辛抱しなくとも生きていけそうだが」

「ふふっそんなこともないさ」

唇が弧を描いて清明は謎めいた笑みを浮かべた。

「さて着いたよ」

ゆったりと歩む牛車なんて、時間がかかって仕方がない。合理性を考えて二人の移動手段は徒歩だった。

姿を見えにくくする術を施して、足早に目的の地へと訪れて俱珂はやおら顔を上げた。

「どうした、紗麗」

「いや、なんでも」

何かが意識の上を掠めた。

けれど、それが何であるかまでははっきりと俱珂にはわからなかった。

屋敷内部へ入ると、人々は宴の最中だった。

長い廊下をすり抜けて、俱珂は清明とは別行動で目的を果たすために歩を進めていく。

その途中で、耳にするりと入り込むように聞こえてきた楽に歩みを緩める。音の方へと首をめぐらせば、目に入るは見知った姿であった。

「……なんと。あの者も、ここに参っていたのか」

屋敷に足を踏み入れる直前に、胸によぎった予感はいったん止まったのか。

人々の視線を受けて、舞台に立つ一人の巫女装束の女。それは紛れもなく、この前、森で迷っていた笛の奏者。美神だった。

舞台の上で衣の裾を翻し、奏でられる楽の音に合わせてその身を軽やかに弾ませる。

おそらくは、巫女の舞。

「ふつ。なんとも、な」

俱珂は己も知らずの内に、苦く笑っていた。

笛の奏者ではなく、巫女だったのか。美神には一度しか会ったことがないながらも鮮烈に印象が残り、覚えていた。

けれども、彼女自身のことを俱珂は何も知らないと言って等しい有様であったので今夜、美神がこうしてこの場所に来ていることも、巫女の所属であることも当然知りえなかったのである。

空を震わせていた音がとまる。

一瞬の沈黙が下りたのちに、あたりには溢れんばかりの拍手が起った。

それに表情を崩すことなく、舞台上から言葉を口にせず優雅に一礼すると美神は踵を返して去って行った。そうして、入れ替わりに

次の者が舞台の前へと進み出る。

美神を見つけてから、しばしするとき。

誰ともすれ違わない廊下で、一人じつと舞台を眺めていた俱珂だが、視線を縫いとどめられることになった者が姿を消すと、自然とその足は動き始めていた。

先ほどまで微動だにせず、熱心に舞台を見つめていたことなど嘘のようだ。

まるで何事もなかったかのように、気配は跡形もない。

しかし、よく目を凝らしてみれば、俱珂の口元が若干の弧を描いていることに気付けただろう。

先刻まで俱珂の視線は、美神を目にしたその瞬間から一時も逸らされることなく、美神へと注がれていた。

体中の感覚が美神へと向いていた。

逆らえない何か为己を引き寄せて、離さない。

驚くほどに心を掴まれていた。その正体が何か知ることはない。

また、それが何かを知るほど美神と会う回数を重ねたわけでもない。彼女を目に映しながら、ある思いが俱珂の意識に浮上する。

声が聞きたい、と思いが。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7209/>

アルカネスの紋章

2010年11月13日12時03分発行